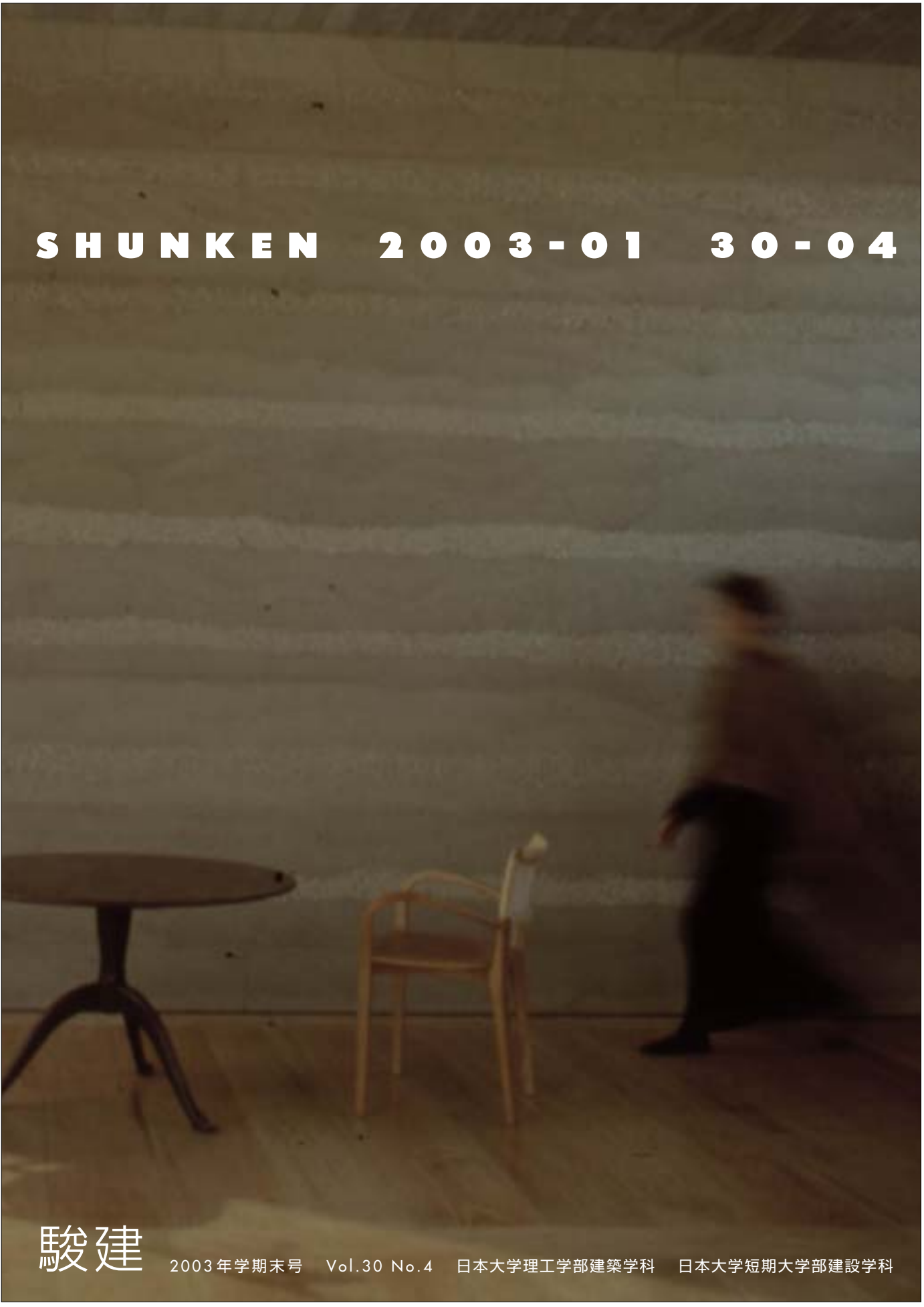


The background of the entire page is a blurred photograph. It shows a person in motion, walking from right to left. In the foreground, there is a dark, round table with a tripod base and a light-colored wooden chair. The wall behind them has a horizontal, textured pattern. The overall tone is muted and artistic.

SHUNKEN 2003-01 30-04

駿建

2003年学期末号 Vol.30 No.4 日本大学理工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

道

日本建築学会賞(作品)受賞

渡辺 明



ピロティより外を臨む(撮影:渡辺 明, 以下※印)

「W・HOUSE」は、私にとって42年にわたる建築家人生の一つの節目となったように思う。思い起こせば、私は今日まで建築家として2つの道を通ってきた。1つ目の道は、日本大学理工学部を卒業後、約20年にわたり在籍した竹中工務店での設計活動である。当時は日本経済が高度成長を遂げていた時代で、今とは異なる恵まれた環境の中で、めまぐるしいスピードに追われながら、質・量共に充実した仕事にかかわることができた。言い換えるならば、建築家として追求すべき思考・技術・知識という3つの要素のうち、技術・知識を徹底的に追及し、次なるステップへの基盤を築けたともいえる。そして、「建築家として生きていくにはもっと勉強を」という思いを胸に、同社を退職、アメリカでの研修に踏み切った。そして、帰国後、2つ目の道である現在の渡辺明設計事務所での道を歩み始めた。以来22年間は、常に自分自身との葛藤だったように思う。そういった試行錯誤の一つとして作りだされたのが、先に述べた「W・HOUSE」である。ご存じの方も多いと思うが、この作品は日本建築学会賞(作品)という大きな賞をいただくことができた。今回の設計にあたり試みた20代、30代の若手スタッフとの世代を越えたディスカッションや、その成果の反映は、私を含めた三つの世代それぞれの良い部分を引き出すものとして自分自身画期的な手法だったと感じていただけに、受賞の喜びも大きく、今後の設計活動への勇気をも与えてくれたように思う。

さて、話を転じて作品自体について簡単に記しておきたい。この「W・HOUSE」は、東京都内のいまだ緑が多く残る閑静な住宅地に位置する集合住宅である。敷地めいっぱい建っている集合住宅がその内部にいくらか魅力的な中庭を有していても、その場の居住者でない我々にとっては単なるそびえ立つボリュームでしかないこと等、都市住宅の在り方が、「環境」という視点に立ったとき必ずしも良い結果を生み出さないことに、私は常々疑問をいだいていた。そこで、敷地内で完結することなく、都市と居住者、その両者にとって良好な環境をつくりだす集合住宅ができないだろうか? というテーマをもとに設計をスタートさせた。しかしながら、今日の集合住宅

は、「容積率を上げる＝収支がとれる」という価値観が根付いており、良好な環境づくりとは相反する感も否めない。私の意図した空間は、周囲を囲む緑の帯と風を含む光を内部へと引き込み、自然や居住者同士の緩やかな関係性をもたらす共有スペースをもつ居住空間であり、都市においては街角の緑や風のたまりとなることを期待する場であったが、一方の容積率という観点から見れば、満たさないという方向でしか成立し得ないものであった。実際にこの作品では、建蔽率、容積率共に法的許容値の半分程度しか使っていない。では収支がみだせる新たな評価基準を、建築家自身がディベロップする手段がないだろうか? この第2のテーマのもと、今回の計画では、容積率を上げるという手法ではなく、建築物のクオリティを向上させ、よりよい環境をつくりだすことにより、評価基準の向上を計ることにチャレンジすることができた。具体的には、建築家として一方的にゼネコンに頼ることをやめ、建築家自身の設計製品監理とCMをはじめとしたCPによる正当な建設費の算出の徹底、及び竣工後のプログラムづくりへの参加により、収益の向上と支出の抑制に努めたものである。

本来であれば、ここで空間性に関しても説明すべきだと思うが、くどくどと文章で記載するよりも図面を見ていただくことが一番わかりやすいと思うので、何かの機会があれば、是非一度雑誌などでご覧になっていただきたい。

さらにここで、審査員の推薦理由(「建築雑誌」2002年8月より抜粋)も転記しておこうと思う。設計者とはちがった視点からの「W・HOUSE」論として、私自身新たな発見もあった。

W・HOUSEは6戸の集合住宅である。比較的良好な環境が残る都心部の住宅地に建つ。通常の企画であると建蔽率(60%)、容積率(150%)を最大限に使い、残った土地もたいていは駐車場にあてるため、例えばまとまった緑地が無残な変容を遂げることになる。この敷地の周辺にもそのような例はいくらでも見てとることができる。

W・HOUSEは、しかしそのような容積至上の功利主

義に対して、まったく異なるアプローチを試みている。周到なマーケティングの結果として、短期滞在外国人を賃貸の対象として選び、建蔽率、容積率を共にセーブしたことで敷地内に緑地を確保して環境を整え、さらに住居構成からインテリアデザインに至るまで住居としての高い質を一貫して提供することで価値基準を上げるという「作り手の戦略」で対応している。コートハウスのように緑地を囲い込むのではなく、外周部を緑化し、それが周辺すなわち都市につながる可能性を残す配置にその戦略に託す作者の意図が現れている。住戸は長手方向に設けた厚い壁に挟まれ南北3層に積層されている。この厚い壁の外側に版築という手法により施工された堆積する柔らかな土の表情がこの建築を第一に印象づけ、周囲の緑と相まって快適な都市生活の内包を予感させる。厚い壁に平行してアプローチとなる階段が直列に配され、各階の踊り場から続く半屋外テラスが住戸前庭のように設けられている。壁が大きく切り取られ、緑地に接続するこのテラスは、心地よく風が抜け住戸間に適度な距離を生む。階段とテラスが作り出す立体路地とも言える屋外の動線の設定がこの集合住宅全体に魅力と快適性を与え、都市集合住宅の可能性を示している。

また、この建築で特筆すべきは、素材に対するこだわりとよく考えられたディテールである。版築をはじめとして、さまざまな木材や石、塗壁などエコロジカルな視点から選ばれた素材群、あるいはそれらの接合部やサツ

シ廻りに見られる内外にわたるさまざまな試みは、一見軽々となされているように見えて、細部に至るまでおろそかにしない作者の確固とした価値観や十分な経験に基づく、周到かつ綿密な検討の結果である。その徹底が分離発注によって実にリーズナブルに得られていることにも驚かされる。さまざまな課題に挑戦し、それらを克服しつつこのような質の高い隙のない建築に結実させる作者の力量は十分評価に値する。

建築家の仕事とは、ロマンを一生かけてつくる仕事である。ただし私達建築家は、それを美化してはいけない。あくまでも市民やユーザーに選ばれる存在として、社会性や環境といったさまざまな分野の中で常に情報を集め、自分なりに消化し、つくり続けなければならないし、つくり続けたいと思う。最近では、海外での展覧会や雑誌掲載の依頼や、国内企業との商品の開発も手がけるようになってきた。国際的なグローバルな視野を含めた上での新しい展開を常に考えなければならない。もしかしたら、この節目を迎え、私は3つ目の道を歩み始めているのかもしれない。

(わたなべあきら・建築家)

筆者略歴

1938年 長野県生まれ
1960年 日本大学理工学部経営工学科建築専攻卒業
1960年 竹中工務店
1980年 渡辺明設計事務所設立



階段室*



テラスからテラスを臨む*



外観（撮影：新建築写真部）

Nihon University 建築フォーラム

若色峰郎



講師を囲んで

近年、大学における建築教育の中でも、特に重要なことは、実践としての建築への理解と興味を高めることであるといわれている。それは、建築を幅広く、そして、より深く知るために、実際の建築に携わる建築家・構造物家・技術者などのさまざまな分野の専門的な実践内容に、直接に触れることが有効で、そうした機会を設けることが教育上極めて重要と考えられるからである。

一方、80余年の歴史をもつ本学科の卒業生は数多く、建築界のさまざまな分野で幅広く活躍されており、その現況を何らかの形で大学院生や学部生に伝えることも、大学と社会の連携を一層強める上で重要なことと考えられている。しかしながら、これまでは桜門建築会（本学建築系3学部+短大のOBの会）の会誌『桜建会報』で、その状況を把握するのみであった。そこで、建築教室が中心となり、桜建会、理工校友会の協力を得ながら、在学生とOB有志を対象とした講演会などを定期的に開催することにより、学生諸君にはOBの活躍を直接に伝え、と共に、実践としての建築をつくる上での思い入れや、苦悩と喜びを知ってもらいたいと考え出されたものである。

このNU建築フォーラムは、当時、教室主任をされていた斎藤公男先生の発案で具体化したもので、第1回目

を平成11年11月に開催し、本年度既に16回の講演会を開催した（表を参照）。本年度までは、建築学科の学生が駿河台キャンパスと船橋キャンパスに分かれていたため、各々2回ずつ、合計で年4回を開催してきたが、平成15年度からは駿河台キャンパスの新1号館がオープンするので、年間の開催数を増したり、講演会+展示などの新しい企画も考えられる。

また、このNU建築フォーラムのもう一つの楽しみとして、講演会の後に行われる講師を囲む懇親会がある。パーティーはささやかなものであるが、講師の方と身近なところで、率直に話を聞くことができるのも魅力の一つとなっている。

企画に当たっては、建築教室内にNU建築フォーラム企画委員会（教室のメンバー+OBで構成）を設け、建築の各分野の情報、OBの活動などを中心に講師を決めている。平成14年度の企画委員会は、建築教室／斎藤（公）・清水・今村・大川・岡田・蜂巢・田所・佐藤（慎）・若色、OB／神田孜・上利益弘が担当した。

このNU建築フォーラムをより活発にするために、新しい提案やテーマ案があれば是非、教室のメンバーに申し出て欲しいと思っている。

（企画委員会幹事・わかいろみねお・教授）



講演風景

講演会一覧

講演会	講演者・講演題目	日 付	場 所
第1回	横河 健 “横河健の仕事～建築のスタンダードを問う～”	1999年11月19日（金） 16：30～18：30	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第2回	今川憲英 “素材と空間を結ぶ構造デザイン～固い素材から柔らかい素材まで～”	1999年12月14日（火） 16：30～18：30	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第3回	Prof. Necdet Teymur “Paradoxes and contradiction of architectural practice 建築実務における逆説と矛盾” “Architectural Practices and / or Architectural Education 建築の実務・教育” 島田良一 “建築教育の国際化と日本技術者教育認定制度～建築学会の対応～”	2000年1月14日（金） 16：30～19：30	理工学部駿河台校舎 1号館2階第2会議室
第4回	日比生寛史 “建築のデモクラシーとバランス～Richard Rodgers Partnershipの チームによる建築論～”	2000年6月30日（金） 16：45～18：00	理工学部船橋校舎 階段教室
第5回	椎名英三 “YES！ 建築”	2000年11月17日（金） 16：30～18：00	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第6回	梅沢良三・金田勝徳 “松井源吾賞受賞記念講演会 私と構造デザイン”	2000年12月8日（金） 16：30～18：30	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第7回	高宮眞介（1号館建設委員会委員長）＋建設委員会メンバー（計画・ 構造・環境） “理工学部駿河台新校舎1号館の設計をめぐって”	2001年1月26日（金） 17：00～19：00	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第8回	杉山知之 “e-アーキテクト～Re-Designing the Future～”	2001年7月6日（金） 16：45～18：15	デジタルハリウッド東京 校 セミナールーム （千代田区神田駿河台2-3 DH2001 Bldg.）
第9回	佐藤光彦 “輪郭の再トレース”	2001年10月1日（月） 16：45～18：15	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第10回	坪山幸王 “船橋校舎14号館B棟（仮称）の設計”	2001年10月31日（水） 16：45～18：15	理工学部船橋校舎 13号館1326教室
第11回	山本理顕 “システムズ・ストラクチャー”	2001年12月7日（月） 16：45～18：15	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第12回	今村雅樹 “21世紀の建築”	2002年1月16日（水） 16：45～18：15	理工学部船橋校舎 13号館1326教室
第13回	澤田 勝 “建築のコラボレーション～さいたま新産業拠点「SKIPシティ」A街 区整備事業プロジェクトを通して～”	2002年6月18日（火） 16：45～18：15	理工学部船橋校舎 13号館1326教室
第14回	岩田明子 “ランドスケープの理論から実践へ”	2002年10月11日（金） 17：00～18：30	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室
第15回	北口雄一 “駿河台校舎1号館の建設にたずさわって 設計から施工へ”	2002年11月27日（水） 16：45～18：15	理工学部船橋校舎 階段教室
第16回	渡辺 明 “W-HOUSE～学会作品賞を受賞して～”	2002年12月6日（金） 16：45～18：15	理工学部駿河台校舎 9号館地下901教室

洲本市立図書館

佐田祐一

このたび「函館市中央図書館の公開プロポーザルコンペ」に、私の師である鬼頭梓氏とJ.V.を組んで応募し、幸運にも最優秀との評価をいただき、現在基本設計を進めています。今回の函館市中央図書館における提案には、その礎となった一つの建築があります。それがこの洲本市立図書館で、私が鬼頭梓建築設計事務所在職中の最後に担当した作品です。1998年の完成となりますが、この建築を振り返って少しお話します。

旧カネボウ洲本工場

敷地となったのは、淡路島の洲本市にある旧カネボウ洲本工場でした。この工場は、明治42年に完成した第二工場を皮切りに、明治末期から昭和初期にかけて、第三、第四、第五工場と、次々に増築を重ね、それらが鋸屋根を持つ煉瓦造建築群として威容を誇っていました。しかし、この洲本工場も昭和61年に操業を停止し、この広大な工場群も荒れるにまかせる状態となっていました。

図書館建設

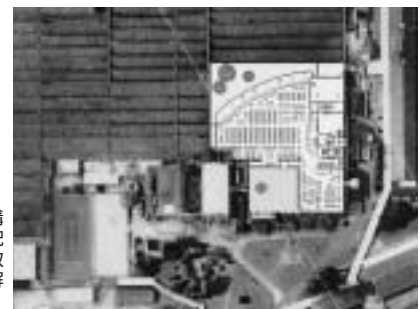
平成7年に実施された、指名9社によるプロポーザルにより設計者が選ばれたわけですが、ここで求められたものは図書館設計と合わせて、旧カネボウ工場の保存と再生のあり方を同時に提案し、解決することでした。

余談ですが、もう25年も前になりますが、卒業設計で横浜にある煉瓦造の三菱倉庫を取り込もうという構想を友人達と議論した思い出があります。今は綺麗に整備されていますが、当時は廃墟として朽ち果てて行きつつある、何とも悲しげな姿で静かに佇んでいました。

廃墟となりつつあるカネボウ工場を見た時、この思い出が回想され、今の自分が成し得る全てをぶつけて図書館の設計にあたろうと思ったものです。

当初、旧工場広場に対峙して建つ二つの塵突をランドマークとして残し、周辺の組積造煉瓦建築群全体の保存を訴えましたが、現在、その後の再開発事業により、残念ながら初期の提案とは全く異なる環境形成に至っています。廻りを取り巻く環境は大きく様変わりしましたが、図書館は旧カネボウ工場群全体を保存整備し、その中に新しい機

能・用途を嵌め込んでいくべき、という当初の全体構想に基づき旧第二工場の一角に嵌め込まれています。



初期の全体保存の構想に基づく図書館配置（現在図書館を取り巻く工場は全て解体されている）

想像以上の改修と傷み

旧第二工場は昭和21年の南海地震や、平成7年の阪神・淡路大震災により軽微な被害は受けていましたが、それ以上に操業時に行われた度重なる増設や改修が甚だしく、また南と東側煉瓦壁の一部以外の全ての煉瓦面には、漆喰やモルタルの上に塗装が施され、場所によっては煉瓦を伝っての地下水の滲出を防止するためかアスファルトまでが施されており、下に隠れる煉瓦の状態は全く判らない有様でした。また操業停止後の建物の傷みも甚大で、一部創建時の形態に近づける復元的作業も求められました。



改修前の煉瓦壁北東角



改修後の自立煉瓦壁北東角

保存と再生

ここで取り組んだ保存・再生とは、新旧が呼応し合うような空間を創出することで、旧第二工場の一角に新たな命を吹き込み、新生図書館の主要な要素として一体化することでした。それは形態だけの保存を優先させて図書館としての機能を犠牲にすることも、図書館機能を優先させての不要な破壊や、見せ掛けだけのレトロな復元も避けることでした。

この図書館は5 m～9 mあった煉瓦壁を図書館入口のある南壁のみを当時のままの高さで残し、それ以外は全て高さを切断して取り込んでいます。ここでは古い煉瓦造建築の保存・再生に対して、決して大上段に構えてはいません。必要と判断すれば煉瓦壁を切断し、孔を開け、積み直しもしています。

しかし先人の仕事に心より敬意を払い、たとえ元の形が変わろうと、新しい建築としての生きた再生こそを追い求めました。



改修前の東側通用口廻り



改修後の東側通用口廻り

作業時に開けられた多くの開口を塞いだり、中庭の床材として多くの煉瓦を使っていますが、これらの9万本を超える煉瓦は、解体煉瓦の塊から一個ずつ丁寧に外し再利用したものです。そしてこの煉瓦を敷き詰めた図書館入口の中庭には、かつての紡績工場としての歴史の記憶を可能な限り残しています。塵突には木の柱の跡をシルエットとして残し、雨漏りの跡もそこに根を張る小さな草もそのまま残しています。煉瓦壁に刻まれたそれら全てが工場の歴史であり、ここで働き洲本市の発展を支えた多くの人々の歴史でもあると考えたからで、これら全てが未来に継承すべきこの図書館の貴重な資料だと今でも思っています。

終わりに

今もこの図書館は穏やかに入館者を迎えてくれます。しかし、この4年の間に図書館を取り巻く環境も随分変わってしまいました。旧原綿倉庫を改修した美術館は既に閉鎖されました。カネボウのメモリアルミュージアムとして図書館と外部空間を共有すべく提案をした、図書館西側の旧発電機棟や旧ボイラー棟は、後にその設計を担当した設計事務所の手により、図書館との連続性はまったく考慮されず、明治建築の力強さも見る影もなく失せてしまいました。

この図書館の中に立つと、過去を踏襲することを避け、真摯に図書館とは何であるかを一から問い直したことを思い出します。少しでも質の高いものを求める時、私は自分が一番執着している部分、変えたくない部分を壊してみます。これらはとても勇気のいることですが、これが私が設計に臨むスタンスです。

今私は函館市中央図書館の設計を得て、再び図書館とは何であるかという問題と新たに向き合っています。

(さだゆういち・建築家)



再生煉瓦を敷き詰めた中庭



全景



図書館内部

筆者略歴

1953年 山口県生まれ
1977年 日本大学理工学部建築学科卒
1977～1998年 鬼頭梓建築設計事務所
1998年～ 佐田祐一建築設計研究所



建築設計・計画研究室：若色研究室

若色峰郎教授，渡辺富雄専任講師

若色峰郎



平成14年 夏の合宿（軽井沢研修所）にて

研究室概況

私たちの研究室は、教員2名の他、構成員として、今年度の場合は大学院生12名（M2-5名，M1-6名，社会人D1-1名），卒研生14名が在籍している。手狭な研究室ながら少人数によるグループ学習を基本として，学生の自主性を尊重した指導を行っている。当研究室は，建築学科で設計・計画系の教授をされていた小林美夫先生が海洋建築工学科へ移籍されたため，その後を受けて，設計・計画系の研究室としてスタートすることになった。以来，すでに30年が経過し，数多くの卒業生が主に建築設計の分野で活躍している。

研究内容

研究室では，建築の設計と計画の関連の中で，建築空間や都市空間のあり方を把握することを研究の主軸にしている。様々な建築型の中で，特に体育スポーツ施設に着目するようになったのは，岩手県営体育館（1967年）及び秋田県立体育館（1969年）の設計（意匠／小林研究室，構造／斎藤研究室）に参画したことが契機となっている。わが国の体育スポーツ施設のうち，戦後直ちに開催された国体（国民体育大会）を契機につくられる大会型の大規模施設は，各県の威信をかけて建設されたが，施設づくりのハード面，運営のソフト面に，様々な問題が認識されたため，これらを研究課題とすることから始められた。

一方，スポーツの第2の道といわれる地域におけるスポーツ需要とその受け皿となる地域スポーツ施設について，調査研究を試みるうちに，スポーツ先進国といわれる旧西ドイツのゴールデンブランを知り，わが国のスポーツ施設整備の遅れを痛感させられた。そして現在，学校体育施設と地域体育施設の複合化，高齢者の健康増進のための施設づくりや，地域スポーツクラブ構想など地域におけるスポーツ施設に関する研究課題も広がりを見せている。

この他，生涯学習施設に関する研究も同じ地域施設研究の領域に入り計画的に興味深い側面をもっていることから，新たな研究の軸になりはじめている。

設計活動

昭和46年頃，理工学部は学科の増設に合わせて，学生や教職員が増え，船橋キャンパス（当時は習志野キャンパス）では，食堂棟（プラザナラシノ），理工スポーツホール，薬学部キャンパスなどが相次いで建設された。そして，その後に，建設された八海山セミナーハウス，先端材料科学センターなどの設計にも関わり，建築設計の各段階における貴重な体験をさせてもらったが，その経験が設計教育の上で大いに役立っていると思っている。

また，設計活動の一部にコンペがある。私のコンペ経験は学部3年時からで，学生時代の思い出の一つになっている。学会のアイデアコンペや，自治体の実施設計コンペなど，コンペにも様々あるが，学生諸君にも是非参加を勧めたい。それは，参加することによって，その建築をより深く知ることが可能となるからである。また，様々な考え方を持つ人たちと真剣に議論し，一つの答えを導くことを体験できるからでもある。最近では，多く情報を瞬時に得ることもできるし，CAADの普及などによって高度なプレゼンテーションも可能になった。何よりも，社会人と同じレベルでチャレンジできるのが面白いと思う。私たちの研究室で，最近参加したコンペには，青森県立美術館，佐世保港ターミナル，青森市北国型集合住宅コンペなどがある。

その他

研究室では，年間行事の一つとして夏休み中に2泊3日の合宿を行っている。例年，八海山セミナーハウスを利用しているが，本年は軽井沢研修所で行った。初日，2日目の午前，卒研，卒業制作の中間発表会が行われ，午後はスポーツ，ドライブなどを楽しみ，夜は恒例のコンパが行われた。M1の幹事の趣向で開催されるコンパは，先輩と後輩の縦のつながりをつけるために重要なイベントの一つになっている。この他，忘年会にはOBや3年ゼミ生の参加もあって，一味違った盛り上がりを見せている。
(わかいろみねお・教授)

空間構造デザイン研究室：斎藤・黒木・岡田研究室

斎藤公男教授，黒木二三夫短大助教授，岡田章専任講師

岡田 章・宮里直也

今年は，大学院生22名，卒研究生15名で研究活動を行っています。ここ数年大学院生の人数が多いのが特徴ですが，卒研究生にとっては，ある意味で好ましい状況かもしれません。

研究室のモットーは“よく学び，よく遊ぶ”。教育・研究・設計の三者のバランスを重視した研究活動，実験やイベントへの企画と実施，春・秋・冬に行われる合宿などで，このモットーは常に意識されます。「好奇心，ものづくりや遊びを通じた経験，五感の研鑽，曖昧さの受容，全脳のバランス，美と均衡，系統的思考」を重視したダ・ヴィンチの活動と相通ずるものがあるのかもしれません。

さて，ここでは研究室の最近のものづくりを通じた幾つかの活動を紹介し，研究室の一端を垣間見てもらえればと思います。もっと詳しく知りたければ，いつでも研究室まで。

山口きらら博Artwork

2001年7月～9月の期間，山口県きらら浜で開催された「山口きらら博」に，アートワーク5作品を出展。山口県産のヒノキの間伐材を使い，木の有効利用とリサイクル・リユースをテーマに研究室の学生と山口県在住の学生と共同で建方を行いました。期間中，約250万人の入場というきらら博の大成功に貢献できたのではないかと自負しています。

江戸東京博物館エアドーム（東京建築展2001イベント）

「両国に遊びに来ていたら，突然大災害が起こって帰

れなくなった！」2001年11月江戸東京博物館で大地震などの災害で帰宅の足が奪われる事態を想定して“段ボールの家”をつくり，宿泊する体験講座が行われました。この段ボールの家を風雨から守る巨大なエアドームによるシェルター（全長約30m）を，研究室の学生とゼミ生が中心となって設計・部材製作・施工を行いました。

スチューデントサマーセミナー'02

2002年10月4，5日，“Student Summer Seminar 2002”が建築会館（建築学会本部）で開催され，延べ180名の学生が参加しました。本セミナーは，大学生・大学院生を対象に「ものづくり」の体験を通して，建築への興味を深めてもらう企画で，8つのスペース・アートの制作・施工と関連する模型やパネル展示を研究室の学生とゼミ生が行いました（次回は2003年8月2，3日に開催予定）。

習志野ドーム

習志野ドームは，1993年から毎年開催され今年度10回目を数えました。この10年で51種類60作品を船橋キャンパスのグラウンドに制作，参加者は約1000人にも及んでいます。今年は，記念大会ということで14作品が造られました。さらには日本大学本部の企画であるNU祭にも応募し，企画賞の優秀賞を頂きました。来年以降も是非，続けていきたいイベントです。

（おかだあきら・専任講師，みやさとなおや・斎藤研D3）



江戸東京博物館エアドーム



スチューデントサマーセミナー'02



習志野ドーム

第34回 建築学生海外研修旅行・報告

ヨーロッパ近代の前と後を重層する空間体験

「この旅行であなた方はヨーロッパの古代と中世を知り、近代と現代建築の知識と事例を十分に体験し、身につけることができます。設計演習や卒業制作の知識として即、活かせるモノも多いでしょう。また、卒業後の建築活動にとっても、最新の知識と情報を身につけて活躍することに役立てることができるでしょう。」

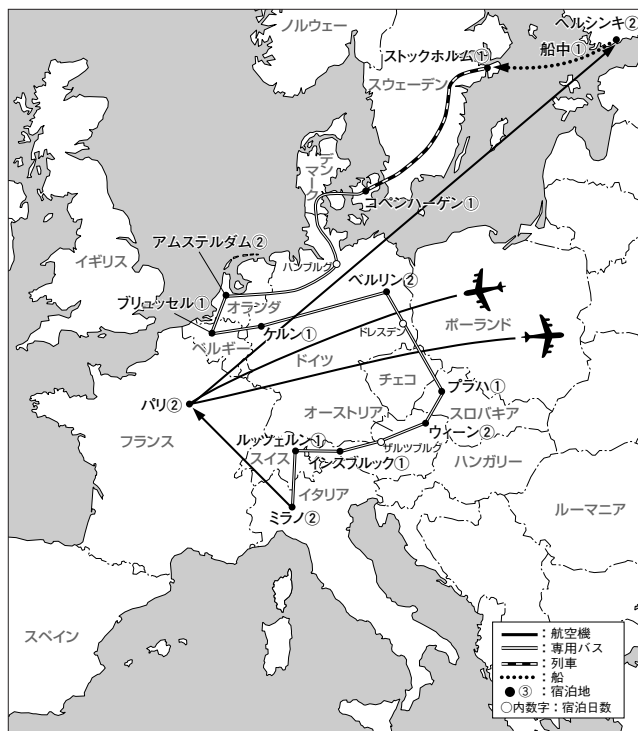
このような主旨で準備した研修旅行でしたが、目的が達成できたでしょうか。参加した学生諸君の建築体験記を報告します。(宇杉)

〈A班〉

日程／平成14年8月20日～9月10日
 引率／平山善吉教授、宇杉和夫助教授
 参加学生／36名（3年生：男子18名、女子18名）
 添乗員／根岸有希子（東急観光）

〈B班〉

日程／平成14年8月23日～9月13日
 引率／清水五郎教授、宇於崎勝也専任講師
 参加学生／35名
 （3年生：男子17名、女子15名、2年生：男子3名）
 添乗員／若林君枝（東急観光）



A班

100戸の老人用集合住宅

鈴木信太郎

8月26日に100戸の老人用集合住宅を見学に行きましたが、設計は、オランダの建築家集団MVRDV。本で見ていたのと実物とは迫力が違います。こんなにキャンティレバーでいいのか?! もう笑いたくなるくらいキャンティレバー! 支えなくなるくらいキャンティレバー! とにかくこの張り出したキャンティレバーと反対の賑やかなバルコニーの対象が面白いと思いました。

アムステルダム郊外オスドルプの集合住宅ポルダーに向かって11.3m突き出た5つの木の箱によって、周辺のどの建物とも面持ちを異にしている住人は55歳以上の老人であるそうですが、隠棲とはまるで無縁です。この建



老人用集合住宅 (MVRDV)

物は法規的な規制により、建築面積が最小、高さもあまり高いものにできなかったため、当初計画された100戸のうち87戸しか建物に入らなかったのだそうです。それなので、残りの13戸を空き地と採光に配慮し、片廊下の

建物の廊下側から11.3mもキャンティレバーで張り出して吊したのだそうです。反対側は、これが本当に老人用の集合住宅？と思うような楽しい外観になっています。外壁は、木製で南京下見張り、そこにオレンジや緑、紫などのカラフルなアクリル板やパンチングメタルで覆われた、様々な小さなバルコニーがついています。日本の基準法じゃ無理な建築だと思います。（3年）

KNSM島

田口 芽

オランダ（アムステルダム）から無料の船で約10分、KNSM（ロイヤル・ダッチ汽船会社）再開発島に降りた。ガイドさんの『無料の船でKNSMアイランドというところにいきます』という何気ない一言で向かった場所だったが、今回の旅行で、最も印象的な場所であった。以前読んだ雑誌に載っていたこの場所は、写真で見ただけでかなり魅力的な場所だったのだが、実際自分の目で見て、そのすばらしさを実感した。

再開発ときくと、高層ビルの建ち並ぶガラス張りの四角い建物がひしめき合う様子を思い浮かべてしまうが、ここは違った。基本的に集合住宅で人々は生活しているようだが、日本のように同じ形、同じ色の箱が並んでいるわけではなく、それぞれが個性を主張しながらも共存しており、全くタイプの違う建築たちでひとつの島を創りあげていた。開発において落とし穴になりかねない個性的かつ人工的な集合住宅や橋を周囲に溶け込ませ、その存在を成功に収めている理由に緑と水と生活との関わりが関係しているのではないかと。一見それぞれが主張しあっている建物の並びも芝生と樹木の連続性の中に存在することでひとつにつながって見え、大胆な曲線で表現された赤い橋は水の流れの中に存在することで連続性をもたせている。このように緑や水のラインで建物同士を結ばせる計画は、日本のばらばらに思える建物同士の新しい組み合わせ方としてヒントになるのではないかと。

KNSM島で建物、環境以外で魅せられたものは、そこに住む人々の明るさ、温かさ、人懐こさであった。彼らは道を聞けば丁寧に笑顔で対応してくれ、目が合えば手を振り、子供達は私達を興味深そうに見つめて照れくさそうについて来たりと、外部の人間に対して心を開いてくれていることがこの島では当たり前のようであった。その心を島の環境がつくりあげているように思う。自然の遊び場や美しい建物、風景を無意識に感じることで心に余裕やゆとりというもの生まれるのではないかと。この島ではそのように、建築と精神のつながりの理想を見た。（3年）

連邦議会新議事堂“ライヒスターク”

高木 剛

ドイツ連邦議会新議事堂はリノベーションを見事に成功させた建築物であろう。この建物は元々は建築家パウル・ヴァロットによって1894年に完成された統一ドイツ初の議事堂ビルであった。その後第2次大戦によって破壊されそのまま放置されていたのが、1957年ごろから改修が始まり、ドイツ議会の各部署が使用し始めたり、マイケル・ジャクソンのコンサート会場になったり、クリストの梱包アートの対象になったりしたが、1992年に本格的に国会議事堂として使用するべく改修コンペが行われた。

現在の形態は1等を獲得したフォスターの当初の案とは異なり、巨大なキューボラが屋上全体を覆い、議場に自然光を導入するというものになっている。自分が訪れたのは暗くなってからであったが、夜は夜で中央のドームは中から見事にライトアップされており、ファンタスティックで非常に美しくてよかったようである。外観は旧議事堂の荘厳なファサードと、近代的なガラスのドームが見事に融合されており、それがとても重厚な印象を受け、ドイツの国会議事堂というプログラムをうまく表現していると感じた。内部空間についてであるが、ガラ



KNSM島の集合住宅の事例



ドイツ連邦議会新議事堂（N・フォスター）



ヴァルスの温泉施設 (P・ズントー)



サヴォア邸内部 (ル・コルビュジェ)

スのドームの中は一般に開放されていた。ドームの下部からは、螺旋状の道が天井まで伸びていて、天井からはメタリックな角錐が真下の会議場まで突き刺さるような感じとなっていた。その中から見たドームは曲線と直線の複合した部分であり、非常に面白い空間となっていて、かつ、ガラスやメタリックな素材はそのハイテクさを強調しているかのようであった。

屋上からはそのガラスのドーム全体が一望でき、見た時が夜であったため内部からの光りで輝いており、中の螺旋と角錐がひととき強調されていた。夜に見た建造物の中ではこれが最も心に残ったものの一つである。屋上から見える夜景も建物に花を添えるように、ベルリンの美しい町並みを見せていた。

(3年)

ヴァルス温泉施設

青山萌美

まずアルプスの山々に私は感動した。日本にはないダイナミックさに驚いたり、空気がとても澄んでいることが高地にきていることを感じさせた。山の中腹には、どのように生活をしているのか疑問に思わせるような位置に家いくつも建てられていた。ヴァルスの温泉施設はこの周辺の環境に沿って建てられていた。この建物に使用されている石は光を放つような性質をもち、ここの土地で採れる石のため、この高原の環境に更に一体感を持たせていると思った。

内部空間はやはり、自然光からのトップライトが魅力的だった。これも、この石を使用しているため、内部の閉ざされた空間の中でいっそう光が反射して神秘さを出していると思った。そのトップライトの外部は植物などが敷き詰めてあり、山々に続いているような眺めで良かった。それは、外部だけではなく内部から見ても同じであった。草の生えた建物は温泉施設だが、エントランスホールからもこの自然と山々が見え、景色を楽しむことができる。これもこの土地の環境をうまく使っている点

だと思った。一度は利用してみたいと思う空間だった。

(3年)

サヴォア邸

薄井麻里

私が今回の研修旅行の中で一番印象に残った建物は、ル・コルビュジェによって設計されたサヴォア邸である。実際にサヴォア邸の中に入って近代建築の5原則であるピロティ・屋上庭園・自由な設計・自由なファサード・横長の窓を体験することができてとても楽しかった。

そして実際に実物を目のあたりにして感じたことは、今までさまざまな本の写真を見て自分が思い描いていたものより敷地も建物も小さいということだ。写真ではわからない、自分が経験してみないと気が付くことのできない良さもたくさん発見することができた。

そのひとつがアプローチである。門を通り、草木の生い茂った小道を少し行くと急に視界が開けて広々とした牧草地が目に入る。そして、その牧草地の真中に建てられたサヴォア邸は一際強い印象を与える。そして正面からピロティの下を通ってぐると裏へ回って中に入る。このピロティの下は車が通り抜ける間隔になっていて、家の入口、玄関ホール、車庫、勝手口を輪のように囲んでいる。依頼主であるサヴォア夫妻が週末になるとこの別荘へ車でやってきて、車のまま家の下まで入り、駐車し、また車で出て行った様子が目に浮かぶようなつくりである。

他にもバスルームとベッドルームを分けるために造られた背のついた休憩用長椅子やトイレと部屋を仕切るための造り付けの洋服ダンス、屋上庭園の花壇、リビングやキッチン、棚や机などといった、各部屋のいたるところにあった造り付けの家具が印象的であった。

このようにサヴォア邸の内部は一見シンプルだが細かい配慮が行き届いていて、とても機能的であった。

また、建物の四方を取り囲む横長の窓のお陰でサヴォア邸の内部はとても明るく、外部の自然がより身近に感じられるようになっていた。そして、所々に効果的に設けられた天窓からの光が、部屋のよさを更に引き出しているように感じた。(3年)

アラブ世界研究所

新井明香

建物南側の大胆なファサードはとても魅力的でした。外観から見ても、整列した幾何学模様(イスラミック模様)は美しかった。中に入るとメタリックな空間が広がっていました。エレベータに乗り上階に上りながら、階数ごとに違う光が創り出す空間を目にすることができました。それはファサードの幾何学模様が創り出したものでした。曇り空から太陽が出て、陽が差し込んだときの内部に透過した光が乱反射する光景は、言いようがないくらい綺麗でした。そして、太陽が隠れるまでの、一瞬しか見ることのできない光の空間ははかないものでした。

メタリックで天井の低い空間が、それをさらに美しく見せていると思いました。

同時に私は、自然とはかけ離れた現代風なこの建物の空間の中で、改めて太陽の光がつくり出す美しさを知ること、不思議に思いました。自然の流れを加え、新たな空間を生み、姿を変え、動き、表情のあるこの建築は、とても興味深いものでした。(3年)



アラブ世界研究所
(J・ヌーベル)

B班

ヨーロッパの都市で

五十嵐一洋

研修旅行への参加は、ヨーロッパにあるさまざまな建築物を実際に見ることができるということはもちろん、同時に各々の国のライフスタイルや文化、習慣などの一端にふれることのできる貴重な機会だと思いました。多くの有名な建築物を訪ねるという意味でも非常に興味深く、日本では見ることのできないミースやピアノ、フランク・ゲーリーなど巨匠と呼ばれる人達の作品や、ヨーロッパのいたるところにある教会建築、また誰もが知っているエッフェル塔やミラノ大聖堂、ベルリンの壁といった観光名所を訪ねることも楽しみでした。

3週間という限られた期間で、北欧から中欧、東欧、南欧とまわる旅。実際行ってみると、国ごとに、また都市ごとに違った顔を持っていることに気がつきました。都市で一番印象に残っているのはプラハです。出発前には異常気象による大洪水で、行けないかなと危ぶまれていたけれど、実際行ってみると修復工事はだいぶ進んでいたようです。街中を歩いていてもそんなことを感じさせず、街や建物の雰囲気がとても重厚で、古い建物と新しい建物がきちんと一緒に感じられるように思いました。(3年)

研修旅行報告

常岡昌史

研修旅行は自分にとって初めての海外旅行であったが、そんな浮かれた気分浸れたのは初日の飛行機内だけであった。パリの空港に着いた途端、研修旅行に切り替わり写真を撮りまくっていた。初めて日本を出て日本語の通じない場所へ行った。最初、英語で話すのには抵抗があったが(通じているかは分からないけど)、1回話してみると恥ずかしさみたいなものはなくなった。また、日本語はもちろん通じないから、相手の話している内容、知っている単語を聞き漏らさないように真剣に集中して



プラハ城と旧市街

人の話を聞いていた。これだけ人の話を真剣に聞いたのは久しぶりだった。ヨーロッパの人たちにとっては見知らぬ外国人がいきなり話しかけてきたのに（しかもたどたどしい英語で）親切に対応してくれた。なかには手を引いて道を案内してくれた人もいた。そういう人たちと多くの会話をしたかったが御礼を言うのが精一杯で自分の勉強不足を悔やんだ。自分の気持ちを相手に伝えるのは日本語でも難しいのに、英語ではなおさら難しい。

また、研修旅行では22日間をみんなと一緒に過ごした。研修旅行に行かなければ話す機会のないだろうクラスの人とも知り合えた。お酒を飲みながら面白い話もしたし、まじめな話もした。みんないろいろ建築のことを考えていて正直、驚きと焦りを感じた。こんなに長い時間をみんなと過ごせるのはやはり学生時代だけで、いろいろなところに無理をしても建築を見に行けるのも今だけだと思った。目的の建物の場所まで電車やバス、自分たちの足を使って移動し、途中の町並みも自分たちの肌で感じることができ、日本との違いも感じられた。有名な建築も実際に自分の目で見て感じたことと、写真から感じたことは違っていた。本などから情報を得るのも勉強になるが、それに合わせて自分の目で実際に見ることがよりその建築を理解することにつながると思う。（3年）

“百聞は一見にしかず”

福田亮子

私はヨーロッパを訪れるのが今回初めてのことであった。あらゆる国のより多くのものを見て、感じたいと思い、研修旅行に参加した。初日から約14時間という飛行時間。こんなにも長く乗るのも初めてで先が思いやられた。しかし、無事旅を終えて振り返ってみると一言では言い切れないほど本当に充実した22日間であったと思う。色々なものを得るために日頃の自分では考えられないほど、とにかく歩いて歩いた！そしてホテルへ帰る門限ギリ

ギリの時間まで街にいたことが多かった。そのため、周囲に迷惑を掛けてしまったことが多かったのも事実。そんな中、今回の旅では改めて感じられたことも多かった。写真などで見て知っている建築、街、風景であっても、実際に訪れてみると良い意味でも悪い意味でも、以前抱いていたものとは違う印象を受けることが多々あった。特に、私にとって教会建築がそれにあたる。写真だけでもすごいと感じるなら、実物は本当～にすごい！写真では伝わらない空間がそこにはあり、本当にそこを訪れてみないとその素晴らしい空間は味わえないと思った。“百聞は一見にしかず”。なんとなく分かっていたものの、そのことを強く実感することができた。また、建築や風景、インテリアなど印象に残ったものをスケッチで残そうという思いが出発前からあった。しかし、その場での滞在時間が短かったため、簡単なスケッチで終わってしまうことが多かった。でも描くことによりその意匠をより理解することができたと思う。また、同じ物を描いていても人によってとらえる部分が異なったりして、興味深く、友達とでき上がったスケッチをよく見せあったりした。

普通はある建築を見たいと思っても、行くだけで一日が終わってしまうということがある。今回の研修旅行は12か国を効率的に見て周ることができてよかったと思う。そして最後に、本当に良き友と一緒に過ごしたこの22日間は忘れられないものになった。本当にどうもありがとうと言いたい。（3年）

視野が広がる旅行

保戸塚智広

ヨーロッパを見て（12か国だが）強く感じたのが「宗教」である。僕の脳裏に強く残っているのは教会や大聖堂である。例えばケルン大聖堂、ミラノ大聖堂、教会もいろいろ見てきたが、とにかく外観の装飾や内部空間に圧倒された。人を模した装飾、巨大で鮮やかなステンド



ユダヤ博物館（D・リベスキンド）



サヴォア邸（ル・コルビュジェ）



バウハウス・デッサウ校舎
（W・グロピウス）

グラス。なぜ人間はこんなものを作るのか？その背景を考えているうちに、「宗教」、そして信じる人々のものすごいエネルギーがあるからこそできたのではないかと考えた。アアルトやコルビュジェ、ワグナー、ジャン・ヌーベルなどの建築も見ることができ、特にコルビュジェの「サヴォア邸」は本当にすごいと思った。そんな中でも、ヨーロッパの宗教建築は特に素晴らしく衝撃を受けた。書きたいことは細かく挙げればきりが無いといった感じである。でもそれほどいろいろなことを考えさせてくれた旅行であったことは確かである。そして欠かせないのが旅行を通してできた友達である。ほぼ毎日飲んで、いろいろなことを話して本当に楽しかった（建築よりこっちがメインかも）。そして最終日にみんなでエッフェル塔から見たパリの景色は忘れないと思う。日本に帰ってきてから、いろいろなことを考えた。新宿などの都心を歩いてみて、パリやニューヨークと良くも悪くも違う東京はこれからどうあるべきなのか、そして戦争の原因となる複雑な宗教問題についても、この旅行をきっかけに、少し視野が広がったと思う。でも自分が知らないことが多過ぎるということにも気付いた。この経験をこれからのことに生かして、がんばりたいと思う。（3年）

パリでの出会い

樋渡敬之

この22日間の研修旅行で私は本当にいろいろなものを得た。研修に旅立つ前、私は有名な建築家の名前や建物は全然知らなかった。全然勉強していかなかったのだから当然のことなのだが。まだ2年生だしという考えもあり、軽い気持ちで参加した。しかし、現地に行ってみるといままでに見たことのないとても新鮮な建築物が目の前に次々と出てくるので驚きの毎日だった。カルチャーショックだった。

どれが一番よかった？と聞かれると私は決まって全部



お別れパーティで

と答えてしまう。特に？と聞かれても本当に全部良かったから答えようがない。写真を1400枚もとってしまうほど建築に熱狂していたのだから。その中から1枚選べというほうが酷である。しかし、一番影響を受けたのは？と聞かれたら、ひとつある。それは、最後に訪れたパリでドミニク・ペローが作った工業センターを訪れたときに偶然でくわした日本人との出会いである。浜田さんというペローの事務所で働いている日本人であった。本当にたまたま偶然であったのだが、ペローの事務所を見学させてくれてペローの今までにコンペで勝ってきた作品の模型などを解説つきで見せてくれた。なぜ、浜田さんがそこまで親切に接してくれたか、浜田さんはなんと日大理工学部建築学科を卒業しているのだ。つまり、私たちの先輩である。本当に驚いた。英語をペラペラ話している姿は、すごいと思った。まさに、憧れの人である。大学を卒業して単身でオランダに渡り、それからペローの事務所で働くことになったらしい。帰国してある建築雑誌を見ていたら海外で働く日本人の特集があり目を通したら、なんと浜田さんが紹介されていた。すごい人に出会えたんだと思い、また感動した。（2年）



デファンス地区

懐かしのインドネシア

海外出張報告 1

重枝 豊



1975年頃のチャンディ・チェト



修復されたチャンディ・チェト

昨年の8月から9月にかけて、東南アジアの文化遺産保存の現状と問題点に関する研究というテーマで35日間の海外調査を行った。対象国はベトナム、インドネシア、タイであったが、今回はインドネシア訪問について報告する。調査内容については年度内に報告書を作成する予定である。

インドネシアへは1989年に日本建築学会歴史意匠委員会の企画で、千原大五郎先生の引率で訪れた。ポロブドール遺跡の修復がほぼ完了し、その国際諮問委員の一人であった千原先生の案内で修復現場を見学した。まだクレーンやコンクリートの型枠が残るなかで、修復の苦勞を熱く語られた先生の姿を今も思い出す。

さて、20年ぶりのインドネシアであるが、道路や外国人用ホテルなどの都市インフラは驚くほど整備されていた。20年もたてば、ベトナムの首都ハノイもこんなふう近代化されるのかと想像すると感慨深かった。しかし、一歩首都ジャカルタを出ると、そこには変わらない農村風景が続き、人々の素朴さはそのままであった。

タイのバンコクもそうだが、東南アジアの近代化は、一つの国の中にもう一つの異国が造られるようにして形成される。中心都市とその他の都市では、すべての面で環境が異なっている。首都で商品があふれていても、地方都市ではその姿をみることもすらない。

インドネシアは7世紀から東南アジア圏内でも秀でた宗教建造物を造営したが、その周辺部はほとんど未開に近い状態であったのだろう。それほど高水準の建築群が国力をあげて造られた理由は、国際交易のためであった。インドや中国などからの商船を招き入れることが、経済力強化にもつながると同時に、新情報入手の手だてであった。文明化された地域であることを証明するテーマパークとして、当時は宗教建築や都市が形成された。中部ジャワが10世紀中頃以降に勢力を衰退させるのは、海のネットワークから取り残されたためでもある。

10世紀中葉以降、文化拠点はジャワ島中部から東部へと移る。両地域の境界にあたるのが、ソロ（スラカルタ）東方ラウ山にあるチャンディ・チェト、チャンディ・スクーという2つの山岳寺院である。20年前はチェト寺院には麓から徒歩で往復3時間という制約があり、訪問は果たせな

かった。スクー寺院ですらバスから途中でジープに乗り換え、ピストン輸送をしてやっと訪問できたほどだった。今回は4WD車を使ったので、チェト寺院訪問が可能になった。乗用車では無理なほどの急勾配の山道が続いていた。寺院の参道に立って周囲を見渡すことができ、それだけで満足だった。眼下に雲がたなびき、周辺の山々から谷間はまるで幾何学模様をみるように隙間なく耕された茶畑がひろがっていた。こんなところに宗教施設を造った人々の想いを感じることができた。20数年前に廃墟のように荒れ果てた写真を見ており、建築としては期待していなかった。それが斜面に14段の段台テラスに刻まれた階段を上るにつれ、次々と現れる復元された建築群をみて感動した。それには二つの理由がある。こんなに条件の悪い場所で修復・復元作業がなされていたこと。もう一つは、その復元作業が8世紀から9世紀に造られた遺跡の彫刻中の建築描写を丹念に検討してなされていたことにある。

紀元前後から5世紀頃まで、東南アジア地域にヒンドゥー教と仏教という新しい宗教（＝アジアを包み込んだニューファッション）が紹介されたとき、そのファッションは土着信仰とミックスして受け入れられた。体系化された宗教としてよりも、現地の人々に受け入れやすく変質された宗教であった。まず崇拜の対象物だけが取り入れられ、土着信仰の神々と一緒にまつられた。信仰対象を容れる建物は木造だったとみられる。次の変化は5世紀前後から神々を容れる器としての建築が、次のファッションとして移入された。その土着的な雰囲気と造形を、このチェト寺院は残している。

ベトナムのチャンパー建築とカンボジアのプレ・アンコール期の建築を主に研究してきたが、これまでイメージしていた信仰の初期形態がさまざまな形で表現されていた。ヒンドゥー教渡来以前から信仰の場とされていた遺跡が、現在の形に整備されたのは13世紀と考えられている。そのためこの遺跡をそのまま初期寺院のサンプルにすることはできない。しかし、今回の調査でインドネシア建築研究の課題と方向性と、今後10年間のアジア研究の方針を構築することができた。アジア地域での建築行脚と各地域のアイデンティティを探る調査旅行が、今後も続くことを予感させられた旅であった。（しげえだゆたか・専任講師）

フィリピン工科大学滞在記

海外出張報告 2

清水五郎



マニラ中心街

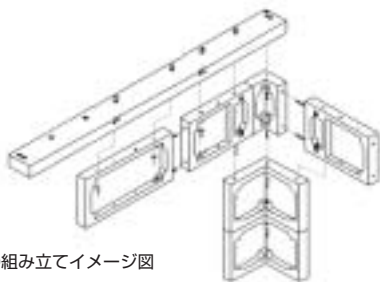
共同研究の中味

本学理工学部とフィリピン工科大学とは、1993年に締結された覚書に基づく提携校として、留学生や長短期研究員の受け入れをはじめ、人的・学術的交流を通じて、相互の協力関係が継続され、今日に至っている。その発端は1983年～88年の政府開発援助（ODA）による同工大に対する理工学部の人材派遣に由来するものである。

同工大は、フィリピンの首都マニラ市内の北西部、マラカニアン宮殿にほど近い文京地域に位置し、土木、機械、電気の3学科と付属の総合技術訓練センター（IRTC）から成り、他に、系列の異なる化学、数学、コンピュータなどの専攻学科が存在する。近年、教授陣の充実によって大学院修士課程が公開されている。

今回のマニラ訪問は、かねてよりフィリピン工大（土木）との間で、鉄筋コンクリート造プレファブ住宅等の開発に関する共同研究が推進され、実大構造実験を含む一連の研究成果が得られたことから、新たな展開として、市場調査、実用化のための情報収集などが必要となり、実現することとなった。本学側の共同研究者には海洋建築工学科の安達洋、中西三和、坪山幸王の各教授の参加があり、研究開発の概要としては次のような内容を目標としてきた。

- 1) ピナツボ火山（マニラ北東約200km、標高1745m）の大噴火（1991年6月）による火山礫を軽量コンクリート用骨材として有効に活用する。
- 2) プレファブによるセル構造体を開発し、住宅、農水産市場、学校等の施設について適用性を検討する。
- 3) セル構造体を構成するエレメントは、小型部材かつ少品種を前提として、組立容易な構造形式とする。



エレメントの組み立てイメージ図

交流と成果

今回の滞在は7月21日より4週間の日程で、IRTCの土木部門に籍をおくことになったが、かつての古巣へ戻ったかのような思いでスタッフとの旧交を温め、親しく交流することができた。マニラ滞在中の居所についてはビジネスの中心街であるマカティ地域としたため、大学までは市内を横断するほど長距離となり、片道約1時間のタクシー通学となった。これには多少の理由があり、毎日の往復が市街地の見学・研修に相当するため、将来のプロジェクト展開の布石として有効な実績となればとの思惑があった。

フィリピン工大を拠点とした研究成果のPRや情報収集に関しては、同大の学長、副学長、研究所所長との懇談の機会が何度かあり、本件のプロジェクトの具体化に際しては大学側として全面的協力の用意があることを約束していただいた。国際協力事業団（JICA）フィリピン事務所では長垣所長との面談が実現し、事業化までの具体策について親切的な助言をいただくことができた。日刊マニラ新聞社では建設関係の政府関係者の紹介、HILTI フィリピン支社からは技術情報の提供など支援に関する良好な感触を得ることができた。今後はこれらの情報に基づき、着実な前進が実現するよう努める所存である。

所感

数年ぶりのマニラ出張のため街並の変化の大きいことに驚くばかりであった。特に、30階を越える高層ビルが林立し、高さを競い合っている。ミラーガラスで覆われた軽快な外装が目が奪われてしまう。しかも、市内に見られる建設ラッシュはその勢いを失っていない。巨大なショッピングモールが点在し、“メガポリス・マニラ”の表現には現実味が加ってきた印象が強く残った。

最後に、現地でお世話になった大学関係の先生方、また、出張の機会を与えていただいた本学の関係各位、出張を支援いただいた事務職の方々に心からお礼を申し述べます。なお、研究内容の詳細については、日本建築学会大会学術講演梗概（構造）2001.9, pp.177～188を参照いただきたい。（しみずごろう・教授）

平成15年度 卒業研究テーマ一覧

3年生までは建築の基礎を幅広くしっかりと勉強し、あまり早急に専門分化しないほうがよいとわれわれは考えています。しかし、大学生活の最後を迎える4年生は、各研究室に所属して、一つの研究テーマに取り組み、それを掘り下げることになります。そして先生方と膝を交えて話し合い、就職や大学院への進学相談、大学院生との交流などを通して、教室では望めない人間的なふれあいと相互のコミュニケーションを得ることによって、

以下の研究テーマは、建築学、企画経営両コースの学生が自由に選択することができます。

(計：計画系、構：構造系、50音順)

構————— **安達俊夫教授・山田雅一助手** (験433-A・B号室)



本研究室は、建築に関連する地盤工学および基礎構造を主な研究対象としている。

平成15年度の卒業研究は、次の4つのテーマを計画している。

1. 砂地盤の液状化特性に関する研究

現在、用いられている簡易液状化判定法には地盤の層構成が考慮されていないなどの問題点が指摘されている。本研究は、地盤系オンライン地震応答実験によりエネルギーの釣合に基づく簡易液状化判定法について検討を行う。

2. 改良地盤の強度・変形特性に関する研究

セメント系改良土の強度・変形特性について、中空ねじりせん断試験により検討する。

3. 締固め砂杭で改良された砂地盤の動的特性に関する研究

液状化対策に広く利用されている締固め砂杭工法は、液状化防止に対する有効性は実証されているが、複合地盤としての動的特性が明らかにされていない。本研究では振動台実験により改良地盤の動的特性について検討する。

4. 住宅建築における基礎設計と地盤調査に関する研究

平成12年4月に「住宅の品質確保の促進等に関する法律」が施行され、住宅建築をとりまく技術的基準が著しく変わりつつある。欠陥住宅をなくすための基礎設計法と

建築学生にふさわしい実力を蓄え、かつ大学生活の最も有意義な思い出がつくり出されるものと考えています。

3年生諸君は4月からの卒業研究着手に向けて、以下のような各研究室の卒業研究テーマや、『駿建』2002年4月号にのっている昨年度の卒業生の就職動向などに目を通して、自分が4年生になってやってみたいことをよく考えておくことを希望します。

地盤調査法について検討する。

上記テーマについて、標記教員2名と大学院生4名が協同して指導に当たります。

卒業生の就職先は、他の研究室と同様に建設業と住宅産業が大半である。ここ数年の大学院生は大手建設会社の技術研究所や施工管理部門、官公庁に就職している。

構————— **石丸辰治教授・石垣秀典助手** (験454号室)



1. 対(地)震性能設計法に関する研究

2. 制震(振)構造の実用化に関する研究

1995年阪神・淡路大震災を契機に、免震・制震構造物の数は急激に増加し、最近では建築センターに申請される高層建築物のほとんどが、何らかのエネルギー吸収装置を設置した制震構造物であるという状況にまでなっている。免震・制震構造物が普及した大きな理由が、地震時の安全性を高めることが可能であるということに言うまでもないが、それらの技術を活用して地震国における長寿命建築物を実現することが、地球環境の視点から要請されているという背景が存在していることも忘れてはならない。

本研究室では、免・制震技術をより一層普及させ、21世紀の社会に貢献していくための具体的な研究テーマとして、低コストな免・制震部材の開発、軟弱地盤上での免震構造システムの開発、廃材を有効活用した免・制震部材の開発などを挙げて活動を行っている。また、今後急速に普及すると予想される戸建免震住宅や伝統的な木造建築物の制震改修プロジェクトなどにも携わっており、

実施設計を通じて建築計画・設備計画・構造計画を融合させた対（地）震システムを構築することも大きなテーマのひとつである。

卒業生の就職傾向については、構造設計事務所、ゼネコンの現場・構造設計部、住宅産業などへの就職が多い。また、官公庁・建設コンサルタント会社、あるいは、免震・制震装置の製作会社に就職する者も増えつつある。

計——井上勝夫教授・橋本 修講師・富田隆太助手
(駿582-A・583-A号室)



建築の目的は、安全で快適な空間の創造にある。空間性能を左右する多くの要因の中で、音・振動は、その制御や対策の基本が、建築の設計・施工に関係することから建設後の改善は非常に難しい。

当研究室は、建築の音・振動環境に対する社会的・学術的要求に応えるべく、現象を物理的に捉えるだけでなく、感覚的側面からのアプローチ、さらには人間工学的見地からの検討も併せて研究を行っている。

1. 住宅の騒音・体感振動の制御に関する研究

このテーマは、住宅内で発生する騒音・振動、住宅内に外部や他住戸から侵入する騒音・振動の制御法を、構造・デザイン・材料・施工法等から検討するもので、具体的には次のような項目が挙げられる。

- (1) 上下階の床衝撃音遮断性能の予測と対策方法
- (2) 住戸間界壁、外壁の遮音性能の改善方法
- (3) 居住床の振動感覚と対策技術の検討

2. 住宅の音環境に対する性能表示に関する研究

住宅を対象とした消費者保護のための「性能表示制度」が実施されて2年が経過した。この研究は消費者が要求する住宅の性能項目、性能ランクを明確にし、性能表示制度で示す性能基準との対応を検討することによって、今後の性能表示制度のあり方について検討する。

3. 居住床のかたさ感覚と快適性・安全性に関する研究

建築と人間の直接的接点は「床」である。よって、床には安全性や快適性に関する性能が特に要求される。この研究は、人の歩行時における快適性向上のために、かたさ感覚を中心として床の仕上げ構造仕様を検討するものであり、対象を高齢者まで拡張し、人間工学的面からの考察も試みる。

4. 子供の音環境に関する研究

成長期にある子供たちにとって、聴覚系を通したいろいろな体験は、将来の感性や考え方に大きく影響する。

この研究は、子供たちが多くの時間を過ごす小学校を対象として、音環境の実態調査、意識調査などを行うとともに、教室空間等の模型実験などから、将来の学校建築、すなわち子供の音環境について検討する。

5. 建築物の電磁環境の制御に関する研究

見えず、聞こえず、臭わないため五感で捉えられない電磁波は、電子機器の誤動作や通信機器の混信、さらには生体系への影響までが懸念され、建築分野でも重要な問題になりつつある。本テーマは、電磁波の物理的側面からの基礎的考察、建築物内の実態把握、設計・構造・材料によるシールド効果などについて検討する。

6. 公共空間における音声情報伝達に関する研究

公共空間における音声アナウンスは、利用者に対する情報伝達手段として重要な役割を担っている。この研究は、建築空間における音声の明瞭性評価を工学的に検討し、情報伝達がスムーズで安全な建築空間のデザインを提案する。さらに光表示など視覚情報が加わった場合の人間の知覚反応を検討して、よりの確な情報伝達方法についても考える。

7. 電気音響システムを用いた音響シミュレーションと音場評価

ドームや屋外スタジアムなどで音声アナウンスや音楽パフォーマンスを行う際には、スピーカを用いた電気音響拡声が行われる。このテーマではコンピュータ・シミュレーションを用いて視覚的に音場を把握し、音声情報伝達を含めた音場評価・設計ツールを開発する。また、模型実験や音場合成による擬似音場評価を行いながら建築形態や内装デザインを検討し、快適でユニークな音響空間の実現を目指す。

最後に転職関係の情報ですが、就職先は、環境系にとらわれず、音・振動制御技術+α能力として身に付け、広い業種に就職している。就職先については、教員が綿密な相談を行い、活発な就職活動を支援しています。平成14年度の主な就職先は、大学院（4）、建設会社（3）、エネルギー（1）、住宅産業（5）、設備系（2）、コンサルタント（1）、建材メーカー（1）、設計事務所（1）、その他（4）でした。

研究室ホームページも参照のこと。

URL：<http://feeling.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

計——今村雅樹助教授 (駿589-A号室)



今村研究室は設計・デザインの研究室です。将来、本当

に建築やインテリアの設計の仕事に就きたい学生を対象に、厳しく指導をしていきます。研究室に入ると、各自のテーマに基づいた卒業設計以外に、研究室としてのコンペや実際の建築設計・計画のプロジェクトに参加して、充実した建築家予備軍としての生活が待っています。この日本大学から一人でも多くの建築家やデザイナーを生み出すために、熱意と感性のある学生を受け入れます。

今村研究室の5原則は、

- ・「建築家・デザイナー」を目指す。
- ・「モチベーション」をもって自ら進んで構想する。
- ・「大学での設計研究」と「学外活動（オープンデスク等）」を両立させる。
- ・「時代の感性」を共有する。
- ・「家具・インテリア」から「都市・ランドスケープ」まで幅広く興味をもつ。

研究内容は、

- ・地域計画／ランドスケープデザイン／地域複合施設／住空間の設計
- ・デザイン論、設計方法論／プログラムと空間

卒業研究・制作テーマは、

1. 建築デザイン（公共空間、商空間、住空間）
2. 都市・ランドスケープデザイン
3. インテリア・家具デザイン

2002年の研究室の活動内容は、次のようにデザインの領域で多岐にわたっています。2003年も同様の活動を予定しています。

- ・小学校、保健福祉センター、住宅の基本計画
- ・コンペティションへの参加
- ・展覧会のインスタレーション／他大学、他の建築家との共同研究やコラボレーション
- ・学内外の建築イベント、企画への参加等

計

宇杉和夫助教授（職589-B号室）



人間環境、建築の設計・計画、評価の方法を探究・構築します。

2つのアプローチが可能です。

- ①自分の意見・プランを提案する。
（意見・提案・デザインを組み立てることを優先する）
- ②資料解釈による空間構成の実証研究
（自己の資料を作成してから結果・意見を出す）
いずれにしても現在の文化・建築・生活空間に対して、きちんとした批評の眼を養い、将来の展望を築くことが

大切です。研究室としては〈多様なコモンスペース〉を評価軸にして、これまでの標準設計・機能都市の概念を越える立場から提案を続けています。テーマとしては、次のものを参考にして、設計・計画の研究を自由に発想してください。

1. 空間・景観・ランドスケープデザイン

（原風景・環境認知・場所性・定位・生態・心理・眺望・視環境・色彩・光・意味・視覚障害・庭園・風水理論・建築空間の構成・近代建築・建築設計手法と建築家・建築デザイン理論・都市デザイン・ランドスケープデザイン）

2. 居住・都市・地域・再生

（住宅・集合住宅・共生社会・共同居住・都心居住・居住地改善・居住福祉・住環境リフォーム・再開発・都市再生・広場・計画史・都市形成・アジアの居住空間・ヨーロッパの居住空間・住文化・ライフスタイル）

3. 地域環境・空間学習・学習空間・地域施設

（地域環境学習施設・小学校・公園・公共施設・リサイクル・文化・祝祭空間・伝承空間・空間幾何学・宇宙と世界・生涯学習・複合施設・多様なコモンスペース・地域環境形成・参加とコミュニティ形成）

また、次の視座を重視します。

- (1) 近代化に対する解釈：近代と近代以後・近代と近代以前の空間・建築に対して自己の視点を築く。近代の空間の中に生育した時代の子として、自己とその役割を考える。
- (2) 住文化に対する理解：ヨーロッパと東アジア、日本の環境と文化に対する理解を深める。近代機能主義・標準設計の課題は住文化とライフスタイルを基礎とする評価につながる。
- (3) 自己のアイデンティティ：オリジナリティの模索、具体的まちづくりへの参加・提案に努める。物的なデザインと考えるのではなく、社会的空間的意味をデザインする。
- (4) 人間環境システムに対する理解：(1)～(3)も含めての総合的な環境づくりにおける自己の役割を理解する。総合的デザインの基に個別デザインがあることを理解する。

これまでの研究室の研究・設計の方法と成果を理解し、コンペ・調査研究に参加するとともに、自主的意欲的にデザイナー・プランナーに向かって自己の目的と方法を発展させることが大切です。進路等についてはよく相談してください。



産業廃棄物を単に廃棄物と見るか、それとも宝の山と見るか。環境保全から見ると、それは宝の山となるのです。これらを再利用するには、幅広い分野の力が必要となります。例えば「ナノの世界」から着目して、自然素材である貝殻等の化学的知識と力学的知識が融合したとき、そこに、新素材が実現します。

ガウディの世界や巨大建造物のピラミッドを構造的に洞察します。その成果をCD-ROMにまとめることで、写真などのデジタル化、デザイン加工のテクニックが身に付きます。

いずれのテーマも、ものづくりから“自分が打ち込めるものを見つけること”が基本になります。そこには必ず“新しい発見”があるはずですよ。

八海山の夏合宿が定番です。積極的に、楽しく、真剣に取り組むことが条件といえ条件です。

1. 自然素材の構造物への応用に関する基礎的研究

〈Key Word〉産業廃棄物、ホタテ貝殻、環境保全、リサイクル

- (1) 材齢の異なる廃棄物を混合したコンクリート(NMC)の強度と破断面の微視的観察
- (2) NMCの化学的性質

2. 建築構造工学に関する研究

〈Key Word〉フォルム、Balance、Power

- (1) A.ガウディの形と力～放物線
- (2) ピラミッドの形と力～構法技術

<http://nmc.arch.cst.nihon-u.ac.jp>



各自が、興味ある研究テーマを提起することを歓迎します。当研究室は、下記の3つのゼミナールで構成されていますので、それぞれのテーマを参考にして、指導ゼミナールを選択してください。指導ゼミナールは固定されますが、それぞれのゼミで行っている勉強会等には自由に参加することができます。

【アジア班 (片桐、重枝)】

アジア地域(とくに、アンコール遺跡など)の文化遺

産の保存活用とデータ収集のためのフィールド・ワークと調査研究

- a. 中国、朝鮮の建築
- b. ベトナムの建築
- c. カンボジアの建築

【日本班 (片桐、浜島)】

1. 「日本建築の伝統を探究する」研究
空間構成、意匠、機能
2. 社寺建築の計画、意匠、技術の調査研究
建築近代化のメカニズムを解明
3. 歴史的建造物や街並みなどの保存再生に関する実践的研究
活用の具体的提案

【近代班 (大川)】

1. 日本近代建築史に関する研究(モダニズム建築、近代住宅史、近代和風建築)
2. 欧米近代建築史に関する研究
3. 建築ジャーナリズム史



都市は人びとが集まって生活する空間であるため、さまざまな機能が要求される。快適な生活を保障するため、多くの課題を解決し、新しいシステムを導入しなければならない。

本研究室では、研究テーマとして地区レベルから都市レベルを対象に、以下のような視点を設定している。

1. 歴史——都市計画史、都市計画法制史、都市形成史
2. 調査・解析——都市調査法、土地利用解析、地域構造解析
3. 計画——都市空間の高度利用(空中権)、伝統的景観の保全、既成市街地の再整備(商店街の再開発・インナーシティ問題等)、居住環境整備(都心居住、生活景)
4. デザイン——都市設計、都市景観調査・解析・計画
5. その他——住民参加、都市開発事業、不動産に関する事業・制度の検討、環境・防災都市に関する研究、etc.

これらの中から、現在または近い将来での都市計画上の課題をふまえ、数回のミーティングにより各自の具体的な研究テーマを設定する。研究は個人またはグループ

で進める。

なお、次の科目はぜひ取得しておいてほしい。「都市計画Ⅰ、Ⅱ」「建築法規及び行政」「建築設計Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」

その他、テーマによっては「建築史」「統計学」等の科目が、または外国語の語学力が必要な場合もある。

研究室ホームページも参照のこと。

URL : <http://urban.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

**構——斎藤公男教授・黒木二三夫短大助教授
・岡田 章講師（駿439-C号室）**



研究の視座（空間構造のめざすもの）は、

- ・構造という力学に裏付けられた技術の世界と、造形という人間のゆれ動く感性の世界を結ぶものは何か。構造とデザイン、あるいは構造技術相互を統合するホリスティックな構造デザインとは何か。
- ・構造には本来、安全性と経済性の確保という大役が課せられている。一方、新しい建築空間をきりひらくという創造的役割のあることを、歴史のあゆみは物語っている。空間構造の今日的な役割は何か。
- ・“力と形”が結晶した秩序ある自然界の形象は、空間構造の原形。釣合形態と立体的な構成システムから生まれる合理性は、大スパン架構の有力な手がかりとなる。

基本テーマは、空間構造に関する研究

- ・過去から今日までの空間構造における構造デザインの諸相を調査・分析する。
- ・新しい素材の特性を踏まえながら、空間構造システムを創出する。
- ・構造特性を理論・解析と実験の両面からとらえ、設計基本データを蓄積する。
- ・実際の構造物の性能を確認し、理論と設計・施工との接点をさぐる。
- ・コンピュータや実験を利用した空間構造の性能解析手法を開発する。
- ・CG、CADによる空間構造の企画設計支援を、構造計画画面から展開する。
- ・多くの人々が楽しさや安らぎを共有できる‘つどいの空間’を研究や実例を通して感じとる。
- ・構造教育へのフィードバックを試みる。

2003年のテーマは、

1. 空間構造および構造デザインの歴史と現況
2. テンション材料（ケーブルと膜）を利用した空間構

成

3. 木質系（特に間伐材）・アルミ材料による空間構造システムの開発と応用
4. テンセグリック構造の開発と応用
5. 空間構造の施工計画支援手法の開発
6. 新しいエコ・材料の考案と適用性の検討
7. テンポラリー・スペースの考案
8. 構造教育用教材およびソフトの開発

研究室の横顔は、

- ・“よく学び、よく遊ぶ”は研究室のモットー。テニス、スキー等もスポーツ力学で上達したいところ。
- ・合宿、OB会、現場見学会等を通じて、タテ・ヨコのつながりを。他を知り、そして自らを磨く。

構——清水五郎教授（駿439-A号室）



当研究室では、主として建設材料と施工に関して、物性の検討や品質評価をはじめ、新素材や新工法の開発等を目標として研究を推進している。課題についてこれまでの実施例を示せば、以下のようなものである。なお、大学院進学希望者の着手を歓迎する。

1. アンコール遺跡の保存に関する材料学的検討*
2. 低層RC造住宅のプレハブ化に関する研究*
3. コンクリートの吸水性状に基づく品質の評価法に関する実験的研究
4. 表面処理による木材の耐火・耐久性向上ならびに人工木材に関する基礎的研究
5. 建築物の防汚に関する研究
6. 新素材の用途開発に関する研究
7. その他
 - (1) 新素材と新工法に関する調査と評価
 - (2) 特許申請の実践
 - (3) 自主テーマ等

*は「卒業制作」と連携することができる。

構——白井伸明教授・森泉和人助手（駿331号室）



本研究室は、建築物のサステナブルな利用を目指して、新しい建築材料の開発、建物の非破壊検査技術および構

造性能評価技術の開発、長寿命化のための補修・補強技術の開発など広範囲にわたる研究を進めております。主として、既存建物を含めて需要の高い鉄筋コンクリート構造物の耐震性および耐久性を研究の対象としています。最近では、生育のサイクルが5年程度と短いため環境負荷の小さい孟宗竹を利用した新構造部材の開発にも取り組んでいます。卒業研究テーマは各自の提案を尊重しますが、研究室としては、例えば次のような研究テーマに取り組んでいます。

1. 新しい構造材料および部材の開発に関する研究（高じん性セメント系材料、孟宗竹を集成材として構造部材）
2. RC構造物の耐久性評価手法に関する研究（ライフサイクルシミュレーション技術の開発）
3. RC構造物の各種限界状態の性能評価に関する計算力学手法による検討
4. RC構造物の非破壊検査手法および補修・補強・免震技術に関する研究
5. 構造実験および構造解析を支援する教育用教材およびソフトの開発

また、本研究室を窓口として、RC構造の耐震補強の専門家である清水泰先生（東工大附属高教諭）の研究テーマも選択できます。力学系の学科目に興味があり、ボランティア精神が旺盛で心身ともに健全な学生は誰でも歓迎いたします。

【計】————— 関口克明教授（駿967-B号室、船622-B号室）



日常生活における快適空間の創造は、建築計画上の基本的な設計指針のひとつです。空間性能をいわゆる設計者のセンスで充分に生かすためには、環境工学的な要因を総合的に把握して設計の中で具体化することが必要で、環境情報の定量化と合理的な環境計画への応用は、質の高い建築空間の創造に欠かせないものとなります。そのためには、環境要因の的確な計測と評価、さらに設計・予測手法の確立が望まれます。

当研究室では、音・光・熱・気流等の環境に関するテーマを扱っていますが、吉野・羽入研究室（住環境総合評価、環境工学とバリアフリー計画等）と共同で、環境・情報研究室として活動しております。

【音環境】

1. コンピュータシミュレーションによる室内音場の予測と3D音場再生システムによる建築計画への応用

2. 音環境における計測システムの開発

3. 縮尺音響モデルによる室内音響設計手法の検討

【色彩・光環境】

1. 建築空間における照明・色彩計画に関する研究
2. 明るさ感の定量化と空間認知に関する研究
3. 都市の安全と街路照明のあり方

【複合環境】

1. 住宅における複合環境の評価手法に関する研究
2. 快適環境の評価手法に関する研究
3. 微風領域における快適環境の評価について

そのほか、環境工学に関する各自のテーマについても、相談に応じます。

上記一連の研究テーマは、心理評価によるデータの統計処理から最新のデジタル技術、マルチメディアの総合によるもので、多くの基礎知識が要求されますが、研究を通じて十分に修得が可能であり、日頃より建築計画・環境工学に対して興味と理解のある人にとってメリットが大きいと考えます。研究意欲のある人は大いに歓迎いたします。

【計】————— 高宮眞介教授・佐藤慎也助手（駿578-A号室）



私達の研究室では、計画よりも設計を、理論よりも実際の作品を通して建築を学んでほしいと考えています。そして、建築を単なる「もの」としてではなく、それが成立する社会、文化などを包摂する環境の構成要素として捉え、研究を行っていきます。研究テーマは、このような主旨を理解した上で各自が自主的に設定し、指導を受けた上で進めていきます。また、当研究室の性格上、設計に興味を持ち、将来設計を志す熱意のある人を歓迎します。研究室としての共通のテーマは特に設定しませんが、以下のようなものが例として挙げられます。

1. 設計手法に関する研究

プログラミングから建築創造に至るまでの実証的な例題の研究。

2. 作品分析、作品評論に関する研究

近代建築以降の実際の作品について、その歴史的背景、地域文化的な背景を考察し、作品分析、作品評論を試み、研究する。

3. 建築と風景の構築に関する研究

建築の場所性に焦点を当て、風景の構築の手法を研究し、ランドスケープデザインやアーバンデザインと建築デザインの関係について研究する。

【計】——野村 勲教授・石田道孝講師・八藤後 猛助手
(駿965号室)



【野村研(野村, 八藤後)】

形態や機能本位に設計されている最近の建築物について、設計の原点に戻り「人間」(健康な成人, 高齢者・障害者を含めたすべての人々)にとって真に好ましく、かつ望ましい建築物とするための方策を技術的な面, 社会政策的な面をあわせて探究します。

研究室では、個人の自主性を尊重しています。研究室で継続して行われている研究を共同して行うほか、個人が興味をもった独自のテーマで研究を進めていくことでもかまいません。以下に、これまでに取り組まれている主な研究をあげますが、みなさんの自主的なテーマ設定を歓迎します。詳細はホームページでもご覧になれます。

URL : <http://sociotech.arch.cst.nihon-u.ac.jp/>

1. 住環境に関する研究
2. 生活や就労のための機器・設備に関する研究
3. 社会福祉施設, リハビリテーション施設
4. 福祉のまちづくり(都市環境, 公共建築, 交通施設)
5. 子どもや高齢者の安全計画に関する研究
6. 就労環境に関する研究

それぞれについて研究形態は、社会調査(聞き取り, アンケート, 実地調査), 実験研究などがあります。

【石田研(石田)】

建築空間・建築環境と地域環境を福祉の視点から見直しを行い、現在と将来のあるべき姿を追求する。建築のもつ新しい価値を提案してほしい。研究室では主に高齢者・障害者など、心身の障害をもつ人や社会的にハンディキャップをもつ人々を対象にして住環境, 地域環境を舞台に多様な研究に取り組んでいる。経済環境の変化と高齢者社会に突入した現在, さまざまな社会システムが見直されなければならない状況を迎えている。卒研生の柔軟な思考と真摯な取り組みで、有意義な卒業研究となるよう期待しています。

1. 福祉施設の統合複合化に関する研究
2. 地域活性化と福祉関連利用施設のかかわり方に関する研究
3. 地域リハビリテーション・サービス, 在宅福祉サービスの効果的実施と地域施設のかかわり方に関する研究
4. ハウスアダプテーションのための住宅改造改修に関する研究
5. その他, 福祉と地域・不動産に関する研究

【計】——早川 眞教授・蜂巢浩生講師(駿453号室)



建築設備, 建築環境を専門とする研究室である。建築設備では「環境負荷低減に配慮した省エネルギーシステムの実現と運用」, 「新しい空調方式の開発と適用」や「医学や薬学の進歩に貢献する実験動物施設」に関する研究などを、建築環境では「通風・換気・気流や熱環境」に取り組んでいる。

以下に、現在実施中の研究を紹介する。

1. CO₂排出量の削減に配慮した都心立地型大学施設の設備システムの研究

地球温暖化の防止が緊急を要する課題である。2001年11月にモロッコで行われた第7回気候変動枠組み条約締結国会議で、わが国はいわゆる京都議定書への批准に同意した。したがって、遅くとも2012年までにCO₂排出量を1990年の6%減としなければならない。しかし、現状のままだと減少どころか、建築分野で15%の増加となるので、エネルギー大量利用の施設は早晩、環境省, 経済産業省や東京都からCO₂排出量の削減や省エネルギーを求められる。本研究はこれに備えて日大駿河台キャンパスの省エネルギー, 省資源を図り、同種の大学施設の設計・計画資料を得ることを目標としている。

平成15年度は9号館の設備が大きく更新される。その効果を測るため、過去2年間の測定の継続、さらにキャンパス全体を対象にした対策の提案とその効果についてまとめる予定。

2. 超高層建物への自然換気の導入条件の研究

グリーンビル(環境負荷低減建築)の具体案の一例として、高層建物に自然換気の導入を実現するための各種問題点の解決に取り組んでいる。平成13, 14年度は、自然換気用の大型吹出し口からの気流の居住環境への影響についての実験を行った。今年度は大気汚染の観点からの是非を検討する。企業の研究所と共同研究。

3. 新1号館には建築設備の分野でも新しい試みを行っている。これら新システムの性能調査および改善を1年間かけて行う。大型建物の新しい空調システムの習得にはまたとない題材と言える。なお、今年度も昨年に引き続き、室内の換気状態を評価する研究を行う。

4. 実験動物施設の環境制御に関する研究

われわれは日々の生活の中で、実験動物から得られる実験結果によって生み出される多くの技術・製品の恩恵を受けている。その実験成績の精度を保証するものは実験動物の遺伝的統御と、動物を取り巻くさまざまな環境因子の適切な制御である。また、実験動物施設はエネル

ギー多消費型施設であるため、省エネルギー対策についても関心が高まってきている。本研究は環境工学の分野から実験動物施設に求められる設備・環境について、その基準の充実や体系化に取り組む。

構————— 半貫敏夫教授 (駿432-A号室)



1. 鋼構造物の耐震設計におけるP-δ効果の影響
2. 鋼構造物の耐震性能における偏芯の影響
3. 鋼構造部材および接合部のエネルギー吸収特性
4. 屋根雪滑落現象の動的シミュレーション
5. 積雪沈降力による構造物の破壊現象の解析

鉄と雪が研究の対象です。だいたいのところ実験4割、解析6割のエネルギー配分を予定しています。新年度の研究スタッフは教員1名+大学院生7名です。博士課程の高橋君が南極・昭和基地での越冬観測を終えて戻ってきました。南極の観測データのおみやげで研究室がいっぱいです。

伝統ある日大構造力学研究室の一員として「構造力学をたのしむ研究室」にしようといつも心がけています。いま、研究テーマが決められなくても、構造で何かやってみようと考えている、夢と意欲のある学生諸君を歓迎します。研究室ではチームワークが大事だと、うちの院生はよく言っています。

卒業生の進路は、学部生が進学1、住宅1、建設6、院生では住宅1、情報1で、バランスの取れた就職先になりました。

構————— 三橋博巳教授 (駿332号室)



当研究室では、ゼミで構造から計画まで幅広い多様なテーマについて勉強した後、個別のテーマごとに分かれて実験や現地調査などをもとに研究を行っている。

研究テーマは以下の通りである。

1. 風洞実験による建築物のシミュレーション
 - (1) 極地・多雪地域における建築物の人工吹雪風洞実験および現地調査
 - (2) 建築物の積雪荷重に関する研究
2. 高強度鉄筋コンクリート構造に関する研究

高強度材料を用いた鉄筋コンクリート有孔梁の耐力および変形に関する研究

3. 都市・建築の防災計画に関する基礎研究

地震・風・雪などによる自然災害と都市の安全性、防災計画に関する調査研究

4. 都市・建築物の維持管理・ライフサイクルマネジメントに関する研究

都市建築物の寿命実態調査と耐用年数、マンションのストック、維持保全、建て替え、ライフサイクル評価等の調査研究

5. 不動産の評価に関する研究

建物の評価、固定資産税評価、中古建物の評価、家屋の税制度などの調査研究

6. 建築・都市の環境システムに関する研究

環境負荷、環境共生、環境管理、居住環境、廃棄物管理、リサイクル、都心居住など、都市の環境改善に関する調査研究

平成14年度卒業生は、学部生13名で、設計1名、不動産関係2名、住宅関係2名、施工1名、大学院4名のほか、多方面にわたる。

計————— 本杉省三教授・佐藤慎也助手 (駿578-B号室)



研究テーマは各自の興味に基づいた申し出により相談の上で決められる。そのため、自ら進んで考え、行動し、考察する積極性が求められる。

研究室としては、オペラ、演劇、音楽、舞踊、ショーなど様々な舞台芸術のための空間について調査する機会が多く、こうした活動を通して、地域文化や生活環境の問題に関心を持ちながら研究を行っている。このため、劇場・ホールなどの芸術文化施設に対する関心と同時に、運営や活動に携わっている人々との幅広い交流が不可欠である。そうした場に出掛け積極的に話を聞ける行動力がなければならない。

継続して研究を行っているテーマは、以下の通りである。

1. 劇場及びコンサートホール

- (1) 舞台空間の使われ方
- (2) ホワイエ内の観客サービス機能
- (3) 客席の構成とデザイン
- (4) フレキシブルな上演空間の可能性
- (5) 舞台美術デザインと劇空間

2. 地域文化活動と施設

- (1) 地域文化施設の利用内容・実態
- (2) 特色ある地域文化活動と施設
- 3. 野外劇場施設
- 4. 伝統芸能空間の源流
- 5. 現代芸術のための空間
- 6. 法が作る建築計画

計——— 柳田 武講師 (駿579号室)



- 1. 計画・設計におけるCAD・CGの活用に関する研究
 - (1) CAD・CGによる設計手法（デザイン・シミュレーション、プレゼンテーション）
 - (2) 計画・設計におけるネットワークの活用
デジタル・デザイン、VDS、デザイン・コラボレーション、等
- 2. 計画手法・設計手法に関する研究
 - (1) 計画・設計情報のあり方とその活用、WWW情報の利用
 - (2) 平面計画、配置計画における数理的手法とその応用
- 3. 企画立案・施設管理（FM）に関する研究
 - (1) 企画段階における情報の収集・分析・企画立案の手法
 - (2) FMによる施設の有効な管理・運用とそのシステム

いずれも「建築の企画・計画・設計・製図という一連の流れの中で、いかにコンピュータを活用するか」ということが大きな共通のテーマであるが、これらに関連したものであれば独自のテーマでもよい。

計——— 若色峰郎教授・渡辺富雄講師 (駿966号室)



私達の研究室では、建築の設計と計画の関連の中で建築・都市空間をとらえることを研究の主軸にしているので、建築の設計に興味を持ち、熱意ある学生を望んでいる。

卒業研究は、その性質上、各自の研究に対する意欲と発想、自主的な活動によって成り立つものと考えている。したがって、研究テーマは各自の申し出に対し相談の上

で決められるので、テーマに対する視点や具体的な進め方等について関連する資料を含めて提示してほしい。

これまでの研究室で行っている研究テーマは、次の通りである。

1. スポーツ・レクリエーション施設に関する研究

施設タイプ別にみた、施設の利用・使われ方などの実態調査を通じた新しい施設像の研究、および文献資料をベースにした研究。

- (1) 広域圏のスポーツ・レクリエーション施設の研究
- (2) 地域の公共・民間のスポーツ施設の研究

2. 生涯学習関連施設の研究

地域社会の中で生涯学習施設はどうあるべきか、施設系別に、管理者や利用者などの立場からみた現状やあり方についての調査研究。

3. 建築空間の計画・設計手法の研究

具体的な作品や作家を例題として、その成立背景を踏まえて、分析・考察を試みる。

(詳細はガイダンス時に資料を配付し説明する)

短期大学部建設学科所属研究室

以下の研究室では、建築学科教室の承認を得た上で、卒業研究の指導を受けることができる。

構——— 中山 優助教授・岡田 満助教授・内藤正昭講師
(駿333号室、船545-B号室、926-A号室、926-B号室)



私達の研究室では、鉄筋コンクリート（RC）構造およびプレストレストコンクリート（PC）構造の研究を対象としている。

1. 開口PCはりの研究

数年来実験的および理論的な研究を続けてきた結果、特別な開口補強を施さない場合について設計手法を確立するに至った。しかしながら、細部について不明な点が残っているので、再度続けて行う。

2. コンクリートのせん断伝達機構に関する実験的研究

せん断スパン比を要因とした軸筋の付着の有無によって、せん断変形に及ぼす影響を明らかにするために、RCおよびPC部材で実験を行い、破壊性状および終局強度について検討を行う。

3. RC構造物の柱、梁接合部の破壊性状に関する研究

地震力が作用するRC架構の接合部では隣接する柱と

梁から大きなせん断力が導入されるので、靱性の高い復元力特性を得るための十分な補強が必要である。また、接合部は柱、梁に比べて補強が困難なため、破壊を避けねばならない。本研究では、柱、梁接合部の破壊性状を実験的に検討する。

4. アルミナセメント鉄筋コンクリートの低温環境における強度に関する研究

昭和基地の建物建設のために、昭和基地から持ち帰った材料（アルミナセメント・骨材・混練水）によってRC構造部材を作製した後、低温養生を行い、その各種強度について実験的研究を行う。

計 小石川正男教授・田所辰之助講師 ・森田吉晃講師（駿333号室、船546-B・921-B号室）



1. 設計競技（デザインコンペ）を通しての創作、設計活動
2. 建築設計競技に関する史的研究
3. ヨーロッパ近代建築史および近・現代建築論
4. 印旛沼の水環境とその保全に関する研究

主に設計、デザイン活動を中心としながら、建築論、建築史、環境計画の分野について学習する。上記の4つのテーマのうち、1.を共通とし、2.3.および4.から一つを選択して卒業研究のテーマとする。設計、研究活動に熱意をもって取り組めることを条件とする。

構 下村幸男教授（駿333号室、船926-C号室）



私の研究室では、地震工学、その中でも、「地盤と建物との動的相互作用」と呼ばれる分野の研究を行っている。同一の設計に基づいて建設された建物でも、建設サイトにより地震時の挙動は大きく異なる。人と人との相性とは異なり、建物と地盤との場合は両者の性質（固有周期等）が近いことは一般に好ましくない。

卒業研究として、次の2テーマを計画している。パソコンアレルギーでない、ガッツのある諸君を歓迎する。

1. 地盤免震に関する研究

二重鋼管杭と地盤改良体及び減衰装置で構成される地盤免震工法に関して、動的相互作用面から研究する。ま

た、減衰材として、タイヤや建設廃材の利用も目指す。本テーマは、石丸研究室との共同研究となる予定である。

2. 隣接構造物の影響を考慮した杭支持建物の地震時挙動に関する研究

軟弱地盤域の都市部に建設される中高層建物を想定し、地震時の建物間の相互作用（クロスインターアクション）の影響をシミュレーション解析から明らかにする。

計 吉野泰子助教授・羽入敏樹講師 （駿967-B号室、船545-A号室）



1. 健康環境指数と携帯用粉じん計のシステム開発に関する研究

中国黄土高原やオトン住居の環境計測の問題点を改善する目的で、誰もが容易に計測できる軽量・小型・省エネタイプ、医療福祉にも貢献する可搬型粉塵計を開発し、付着するウィルスを考慮した健康環境指数を提案するシステムを構築します。

2. 中国都市住宅におけるエネルギー消費の実態とエコロジカルな環境形成技術の開発に関する研究

文部科学省科学研究費助成による東北大学との共同研究（2年目）です。現在、日本建築学会の特別研究に指定されており、中国各都市住宅における温熱環境を中心とした実測を行います。

3. 「地球環境時代における住環境教育のあり方」に関する研究

平成14年度日本建築学会大会（北陸8月）環境工学部門研究協議会において、地球環境委員会と共催したテーマです。住環境教育に関する実践例、事例調査を行い、特に、幼児・小児を対象とした室内環境および省エネルギーに関する啓蒙資料や活動を紹介し、今後の環境教育のあり方を提案・実践していきます。

4. 生体情報に着目した中国民家技術の現代的適用と遠隔型ヘルスケアシステムの開発

生体計測情報とリンクした遠隔型ヘルスケアシステムの開発と並行し、住戸性能・冷暖房システム・気候特性による生理心理反応への影響を居ながらにして把握でき、今後予想される超高齢社会においても、予防医学の観点から状況の認知判断を遠隔地から支援し、注意を喚起するシステムを開発する研究です。

5. 「バイオマスにつぼん戦略構想」における環境適合型住宅の材料開発に関する研究

中国内蒙古ホルチン沙漠における民居の測定（科研費

助成)結果から、住環境改善を目標として断熱材を開発しました。これらエコマテリアルを政府のバイオマス日本戦略と連動させていきます。

6. 建築空間における響きの研究

世の中には奇跡的に美しい響きがあります。ウィーンのムジークフェラインザールのきらびやかな響き、ヨーロッパの教会の荘厳な響き……。これらは建築空間によって生み出されます。また、建築空間だけでなく森の響きにも着目して、屋外コンサート空間の研究にも取り組んでいます。

7. 自然な変動を利用した快適環境の制御方法に関する研究

不快な要素を取り除いても最適な環境はできません。むしろ人が快適と感じる変動を積極的に与えることによって、完全に一定に制御された環境でない、自然で快適な環境をつくるための研究です。そのために山や川、森

などの自然の快適環境を調査します。

以上の研究は、建築学科関口研究室とチームを組み、環境・情報研究室として活動していきます。

『駿建』2002-11号掲載の「2002年度 日本建築学会大会 建築学科教室関係者発表論文リスト」に、下の論文を追加します。

建築歴史・意匠

9263 韓国河回村における眺望と景観構成に関する研究 河回村及びその周辺からの眺望 ○金 眞鎬 (日本大学院)・宇杉和夫

9275 地域条件からみた同潤会青山アパートの保全とその意味に関する研究 「表参道同潤会アパート地区・東京環境景観学習シティ構想」の検討と提案 ○塚部 彰 (アトリエ空間組織)・宇杉和夫・小島達雄

■宮里直也君 (斎藤研D3)、岡田章専任講師、斎藤公男教授連名の原著論文「逆工程解析に基づくテンション構造の工法選択手法の提案」が、日本建築学会構造系論文集No.560 (2002年10月号)に掲載された。

■斎藤公男教授、竹内徹氏 (新日本製鐵)、岡田章専任講師、鈴木一弁氏 (新日本製鐵)、金田勝徳氏 (68年卒業)、中村博志氏 (新日本製鐵)、渡邊朋宏氏 (93年卒業) 連名の原著論文「テンション構造用付加減衰機構を有するスタジアム屋根の振動性状」が、日本建築学会技術報告集第16号 (建築雑誌2002年12月増刊)に掲載された。

■吉野泰子短大助教授は、10月13、14日に中国上海同済大学で開催された国際ワークショップ「2nd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings in China」にて、chair personを務め、関口克明教授、劉加平西安建築科技大学教授と連

教室ぶろむなード

名の「A Study on Questionnaire Survey in Old and New Yao Dongs Around the Loess Plateau of China」を日中共同プロジェクトの成果として発表した。本会議は、日本建築学会、空気調和衛生工学会、中国建築学会等と共に理工学部が共催した。

■田所辰之助短大専任講師は、京都国立近代美術館で開催された展覧会「クッションから都市計画まで ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相」のカタログを執筆した。また、関連企画として立命館大学で開催された国際シンポジウム「ドイツ工作連盟の歴史的位置づけと現代的意義について」にて、パネリストとして講演を行った。同展は、1月18日

～3月9日まで東京国立近代美術館でも開催される。

■建築学科OBの稲葉修氏 (76修了) 他が開発した三井ホーム「LT住宅」が、米国住宅建築雑誌「ビルダー」主催の「ビルダース・チョイス・デザイン&ブランディング・アワーズ インテリア部門賞」に選ばれた。「LT住宅」は、宇杉和夫助教授が三井ホームからの委託研究「新しい家族と住いのあり方に関する調査研究」(日本大学理工学研究所)で提案した「ウチヒロバ・コモンスペース型住宅」で、同助教授は「LT住宅」の開発にも助言してきた。

■石渡洋光君 (都市計画研4年) が、「坪井地区 街並みデザインアイデア募集 最優秀賞」(主催：㈱都市開発技術サービス)に選ばれた。坪井地区において、これからの新しい街に相応しい美しい街並みをつくりだすためのデザインコンセプトとルールの提案が求められたもの。

●駿建目次

(2003.1 Vol.30 No.4 通巻121号)
表紙 「W・HOUSE」
設計：渡辺 明
撮影：高木由利子

道	2	第34回建築学生海外研修旅行・報告	10
Nihon University 建築フォーラム	4	懐かしのインドネシア	16
私と建築	6	フィリピン工科大学滞在記	17
研究室紹介		平成15年度卒業研究テーマ一覧	18
建築設計・計画研究室	8	教室ぶろむなード	28
空間構造デザイン研究室	9		

『駿建』 発行者・片桐正夫：千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
■編集委員：本杉省三・岡村武士・根上彰生・重枝 豊・渡辺富雄・石垣秀典・佐藤慎也・佐藤直樹・星 和磨 ■印刷：奥村印刷㈱

助成)結果から、住環境改善を目標として断熱材を開発しました。これらエコマテリアルを政府のバイオマス日本戦略と連動させていきます。

6. 建築空間における響きの研究

世の中には奇跡的に美しい響きがあります。ウィーンのムジークフェラインザールのきらびやかな響き、ヨーロッパの教会の荘厳な響き……。これらは建築空間によって生み出されます。また、建築空間だけでなく森の響きにも着目して、屋外コンサート空間の研究にも取り組んでいます。

7. 自然な変動を利用した快適環境の制御方法に関する研究

不快な要素を取り除いても最適な環境はできません。むしろ人が快適と感じる変動を積極的に与えることによって、完全に一定に制御された環境でない、自然で快適な環境をつくるための研究です。そのために山や川、森

などの自然の快適環境を調査します。

以上の研究は、建築学科関口研究室とチームを組み、環境・情報研究室として活動していきます。

『駿建』2002-11号掲載の「2002年度 日本建築学会大会 建築学科教室関係者発表論文リスト」に、下の論文を追加します。

建築歴史・意匠

9263 韓国河回村における眺望と景観構成に関する研究 河回村及びその周辺からの眺望 ○金 眞鎬 (日本大学院)・宇杉和夫

9275 地域条件からみた同潤会青山アパートの保全とその意味に関する研究 「表参道同潤会アパート地区・東京環境景観学習シティ構想」の検討と提案 ○塚部 彰 (アトリエ空間組織)・宇杉和夫・小島達雄

■宮里直也君 (斎藤研D3)、岡田章専任講師、斎藤公男教授連名の原著論文「逆工程解析に基づくテンション構造の工法選択手法の提案」が、日本建築学会構造系論文集No.560 (2002年10月号)に掲載された。

■斎藤公男教授、竹内徹氏 (新日本製鐵)、岡田章専任講師、鈴木一弁氏 (新日本製鐵)、金田勝徳氏 (68年卒業)、中村博志氏 (新日本製鐵)、渡邊朋宏氏 (93年卒業)連名の原著論文「テンション構造用付加減衰機構を有するスタジアム屋根の振動性状」が、日本建築学会技術報告集第16号 (建築雑誌2002年12月増刊)に掲載された。

■吉野泰子短大助教授は、10月13、14日に中国上海同済大学で開催された国際ワークショップ「2nd International Workshop on Energy and Environment of Residential Buildings in China」にて、chair personを務め、関口克明教授、劉加平西安建築科技大学教授と連

教室ぶろむなード

名の「A Study on Questionnaire Survey in Old and New Yao Dongs Around the Loess Plateau of China」を日中共同プロジェクトの成果として発表した。本会議は、日本建築学会、空気調和衛生工学会、中国建築学会等と共に理工学部が共催した。

■田所辰之助短大専任講師は、京都国立近代美術館で開催された展覧会「クッションから都市計画まで ヘルマン・ムテジウスとドイツ工作連盟：ドイツ近代デザインの諸相」のカタログを執筆した。また、関連企画として立命館大学で開催された国際シンポジウム「ドイツ工作連盟の歴史的位置づけと現代的意義について」にて、パネリストとして講演を行った。同展は、1月18日

～3月9日まで東京国立近代美術館でも開催される。

■建築学科OBの稲葉修氏 (76修了) 他が開発した三井ホーム「LT住宅」が、米国住宅建築雑誌「ビルダー」主催の「ビルダース・チョイス・デザイン&ブランディング・アワーズ インテリア部門賞」に選ばれた。「LT住宅」は、宇杉和夫助教授が三井ホームからの委託研究「新しい家族と住いのあり方に関する調査研究」(日本大学理工学研究所)で提案した「ウチヒロバ・コモンスペース型住宅」で、同助教授は「LT住宅」の開発にも助言してきた。

■石渡洋光君 (都市計画研4年) が、「坪井地区 街並みデザインアイデア募集 最優秀賞」(主催：㈱都市開発技術サービス)に選ばれた。坪井地区において、これからの新しい街に相応しい美しい街並みをつくりだすためのデザインコンセプトとルールの提案が求められたもの。

●駿建目次

(2003.1 Vol.30 No.4 通巻121号)
表紙 「W・HOUSE」
設計：渡辺 明
撮影：高木由利子

道	2	第34回建築学生海外研修旅行・報告	10
Nihon University 建築フォーラム	4	懐かしのインドネシア	16
私と建築	6	フィリピン工科大学滞在記	17
研究室紹介		平成15年度卒業研究テーマ一覧	18
建築設計・計画研究室	8	教室ぶろむなード	28
空間構造デザイン研究室	9		

『駿建』 発行者・片桐正夫：千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
■編集委員：本杉省三・岡村武士・根上彰生・重枝 豊・渡辺富雄・石垣秀典・佐藤慎也・佐藤直樹・星 和磨 ■印刷：奥村印刷㈱